
土地分類基本調査

修善寺

5万分の1

国土調査

静岡県

1980

序 文

本県では、健康で文化的な生活環境の確保と県土の均衡ある発展を図ることを基本理念として、人間性豊かな地域社会づくりを進めております。

このためには、限りある土地資源を適正かつ有効的に利用することが極めて重要な課題となり、基盤である県土の実態を総合的に把握することが必要となります。

さいわい、国土調査事業ではこれに対応する手段として、土地についての質的調査を土地分類調査、量的調査を地籍調査、水関係の量及び質的調査として水調査、の三つの制度があり、この制度に基づき適正な土地利用計画を行うための基礎資料を作成しております。

本県においては、この制度を活用して土地分類調査を昭和45年度より13図幅、地籍調査を昭和28年度より862 km^2 の区域で調査を完了させ、更に水調査についても昭和55年度からそれぞれ実施しております。

本来、国土調査事業は前述の三つの制度が足並みを揃えることにより、総合的にその機能を果たすものでありますが、今日までの実施状況は、その事業進捗とあわせて、かならずしもバランスのとれた充分なものとはいえません。特に地籍調査については、市町村における土地利用に関する諸行政の企画、立案、事業計画の策定、事業にともなう用地買収等の基礎資料として広範囲に活用され、望ましい計画の樹立と事業の円滑な実施、能率の向上と経費の節減に大きく貢献する調査であります。

又、土地分類調査については、すでに完了した13図幅及び今回とりまとめた修善寺図幅等は、その地域における地形、地質及び土壌など土地に関する要素の特性を総合的に把握することによって、地籍調査の成果の活用をはかると共に、各種土地開発、並びに土地保全計画等の基礎資料として市町村行政面に大きく貢献する調査であります。

従いまして、本調査事業の進捗アップが更に進展するよう、今後共、関係市町村各位の尚一層の御理解と御協力をお願い申し上げます。

なお、本調査の実施に当たって御協力いただきました関係各位に対し深く感謝申し上げますとともに、今後とも一層の御協力をお願いする次第です。

静岡県農地森林部長 鈴木 和 可

ま え が き

- 1 本調査の事業主体は静岡県であり、国土庁土地局国土調査課の指導をえて実施したものである。
- 2 本調査の成果は国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図および土地分類基本調査簿である。
- 3 調査の実施、成果の作成機関および関係担当者は下記のとおりである。

総合企画調整編集	静岡県農地森林部農地企画課	課長	中本庸弘
		係長	小笠原勝彦
		主任	山本貢
		技師	加藤忠敏
地形調査	静岡英和女学院短期大学	教授	北川光雄
傾斜区分調査	〃	〃	〃
水系谷密度調査	〃	〃	〃
表層地質調査	静岡大学理学部	教授	土隆一
	〃	助教授	黒田直
	〃	助手	炭木雅子
	静岡大学教養部	教授	伊藤通玄
土壌調査	静岡県農業試験場	主任研究員	近藤鳴雄
	〃 林業 〃	主任研究員	縣富美夫
	静岡大学農学部	教授	加藤芳朗
	東京農工大学農学部	助教授	浜田竜之介
土地利用現況調査	静岡県農地森林部林政課	主任	渡辺光男
	静岡県農業試験場	主任研究員	近藤鳴雄
	駒沢大学		山口一俊
利水現況調査	静岡県農地森林部農地企画課	主任	山本貢
	〃	技師	加藤忠敏
	静岡県沼津土地改良事務所	主任	土屋泰宣
協 力	東京農工大学農学部	教授	黒部隆
	駒沢大学	教授	長沼信夫

目 次

序 文

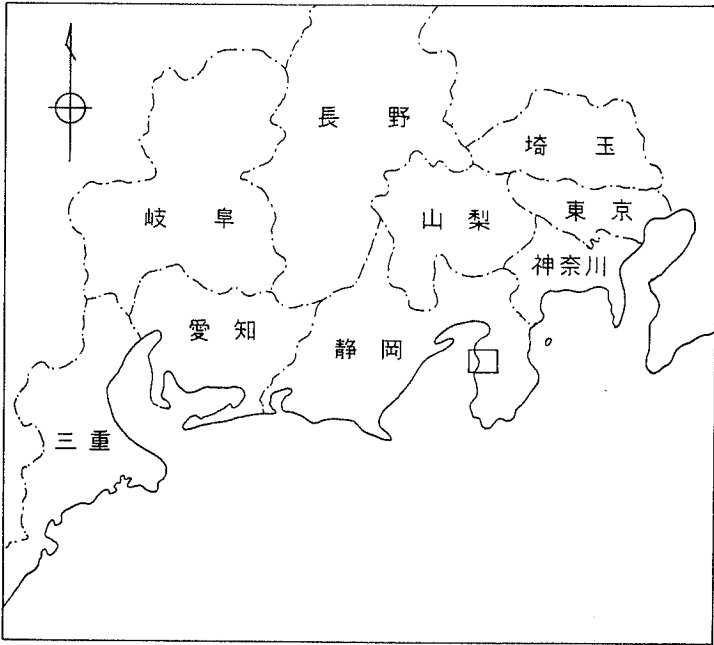
総 論

I 行政区画	1
II 人 口	2
III 図葉内の地域の特性	4
IV 主要産業の概要	7

各 論

I 地形分類図	17
II 表層地質図	28
III 土 壌 図	31
IV 傾斜区分図	42
V 水系谷密度図	43
VI 利水現況図	45
VII 土地利用現況図	48

位置図



総論

I 位置及び行政区画

1 位置

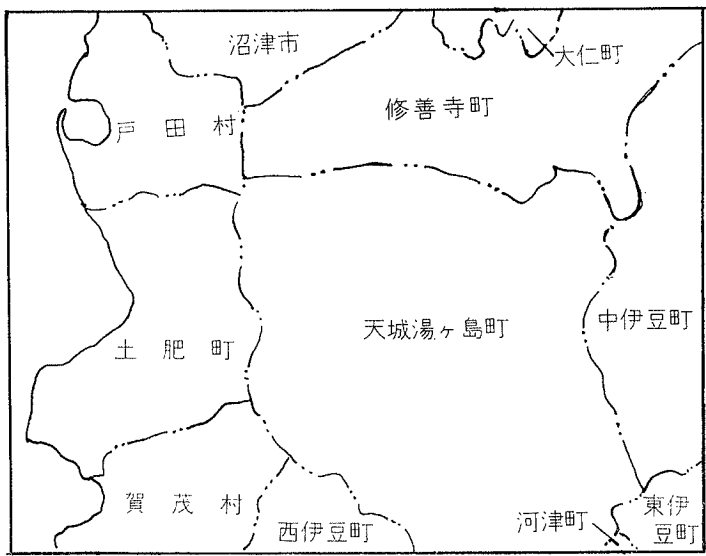
「修善寺」図幅は、静岡県 の 東南部に位置する伊豆半島にあって、一方を駿河湾に接する東経138°45'～139°北緯34°50'～35°00'の範囲で、図幅内面積は約423km²、このうち陸地面積は380km²で海面積43km²である。

2 行政区画

「修善寺」図幅に係る行政区は、第1図に示す沼津市、修善寺町、土肥町、大仁町、中伊豆町、東伊豆町、天城湯ヶ島町、河津町、西伊豆町、賀茂村、戸田村の1市8町2村の11行政区である。

なお、市町村の面積及び占有率は第1表に示すとおりである。

第1図 行政区区域図



第1表 図幅内

市町村名		沼津市	修善寺町	土肥町	大仁町	中伊豆町
区 分						
市町村全面積 A (km ²)		151.17	69.10	50.16	43.60	110.13
図幅内 面積	陸地 B (km ²)	16.3	63.9	50.1	4.4	39.5
	構成比 (%)	4.3	16.8	13.2	1.2	10.4
	B/A (%)	10.8	92.5	100.0	10.1	35.9

資料：建設省国土地理院「全国都道府県市町村別面積調」

Ⅱ 人 口

第2表 世帯数,

市町村名			沼津市	修善寺町	土肥町	中伊豆町	戸田村
区 分							
昭和 45年	人	男	93,944	8,454	3,254	3,427	2,609
		女	95,094	9,000	3,921	3,663	2,627
	口	計(A)	189,038	17,454	7,175	7,090	5,236
		世帯数	49,536	4,148	2,004	1,514	1,286
昭和 50年	人	男	99,281	8,670	3,212	3,552	2,470
		女	100,044	9,200	3,771	3,713	2,643
	口	計(B)	199,325	17,870	6,983	7,265	5,113
		世帯数	56,135	4,594	2,118	1,611	1,336
45年 50年 の 比較	人	男	5,337	216	△ 42	125	△ 139
		女	4,950	200	△ 150	50	16
	口	計	10,287	416	△ 192	175	△ 123
		世帯数	6,599	446	114	97	50
人口伸び率 B/A			105	102	97	102	98

(注：国勢調査)

市町村面積

東伊豆町	天城湯ヶ島町	河津町	西伊豆町	賀茂村	戸田村
77.91	133.51	101.29	65.59	39.46	35.28
6.6	130.0	0.4	8.8	26.6	33.4
1.7	34.2	0.1	2.3	7.0	8.8
8.5	97.4	0.4	13.4	67.4	94.7

図幅内面積は国土地理院発行の地形図より計測

人口

西伊豆町	東伊豆町	河津町	賀茂村	大仁町	天城湯ヶ島町
4,768	7,608	4,590	2,427	6,637	4,402
5,127	8,612	5,034	2,611	6,632	4,754
9,895	16,220	9,624	5,038	13,269	9,156
2,580	4,354	2,435	1,289	3,230	2,169
4,905	8,225	4,641	2,321	6,948	4,069
5,209	9,099	5,131	2,518	7,052	4,374
10,114	17,324	9,772	4,839	14,000	8,443
2,814	4,999	2,613	1,309	3,588	2,136
137	617	51	△ 106	311	△ 333
82	487	97	△ 93	420	△ 380
219	1,104	148	△ 199	731	△ 713
234	645	178	20	358	△ 33
102	107	102	96	106	92

Ⅲ 図幅内地域の特性

1 地 勢

本図幅地域は、伊豆半島のほぼ中央を東西に走る天城山脈の北西に位置し、東部は箱根山地から天城山地に連なる稜線により伊東市に、西部は遠磨山(標高982m)棚揚山(標高753m)猫越山(標高996m)を結ぶ稜線からの西急斜面によって、駿河湾に接しており、海岸は海食崖の地形に特色がある。

このように地域のほとんどをしめている山地の植生を見ると、東部の多賀、天城、天子火山地と共に、駿河湾沿いの西伊豆火山群からなる山地は、国有林を中心にスギ、ヒノキを主体とした人工林が見られ、里山地域にはクヌギ、コナラ等の雑木林が多い。また緩傾斜地にはゴルフ場、別荘分譲地も見られるが、この地域の山地には山地崩壊や地すべりの発生も多く、治水、治水等の配慮と共に、地形が改変された場合には防災的な措置が必要になってくる。

この地域の主要河川で天城山地に源流をもつ狩野川は、幾多の支流を伴って北流しており、流路に沿って段丘地形も見られ、上流部並びに各支流の狭い谷底低地は水田化されており、修善寺付近までくると谷巾は500m~800m程度まで拡がり、沖積層により形成された田方平野に移行して行く。

一方、西伊豆山地から流れでて駿河湾にそそぐ小河川沿いに形成されている井田、戸田、土肥、宇久須の沖積低地も水田を主体に利用しており、山麓には集落が立地している。

2 気 象

伊豆半島の中央部に位置する本図幅地域は、海洋性気候の特徴を示し、全国的に見ても極めて気候が温暖で、平均気温も15℃前後と恵まれた気象条件にある。

しかし、天城湯ヶ島町、中伊豆町、修善寺町などの内陸部では気温の較差が大きく、降雪も見られ、寒冷がきびしいのに比べ、海流の影響を受ける沿岸部の土肥町、賀茂村戸田村は温暖でキク、カーネーション等の露地栽培も盛んである。

雨量は、県内の3多雨地域のひとつである天城山域をひかえていることから、湯ヶ島観測所では年平均降水量3135mmを記録し、県平均の2300mmに比べて3割以上も多い。

昭和33年9月26日の狩野川台風(湯ヶ島、日雨量694mm、時間最大雨量120mm)の際に

は天城山一帯の豪雨により狩野川が氾らんして、沿線の市町村に大水害を与えたことは記憶に新しい。

第3表 気 象 表 (昭和49年～53年, 5カ年平均)

月別 区別	観測所	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年平均
		最高気温	三島	18.2	20.7	20.5	25.9	29.1	31.0	35.3	35.2	34.3	28.7	
	湯ヶ島	14.3	17.4	19.6	22.6	29.0	29.8	35.2	35.1	34.4	29.6	25.9	20.5	26.2
	土肥	18.5	18.9	21.8	23.5	28.2	31.5	35.6	35.7	32.5	30.0	26.2	21.2	27.0
最低気温	三島	-6.8	-8.2	-4.9	-0.4	6.5	10.1	11.6	16.9	11.3	3.4	-2.5	-5.9	2.7
	湯ヶ島	-6.1	-5.0	-4.2	-0.4	6.0	12.7	16.6	16.5	11.9	6.9	-1.7	-5.1	4.0
	土肥	-3.0	-4.0	-2.1	2.1	9.7	11.9	9.9	19.3	12.0	7.0	3.5	-1.8	5.4
平均気温	三島	4.4	5.4	8.7	14.2	18.2	22.0	25.0	26.0	22.2	17.4	12.3	7.2	15.3
	湯ヶ島	4.4	5.7	7.9	13.8	17.4	21.4	23.1	25.7	22.2	17.2	11.0	7.1	14.7
	土肥	6.2	7.0	10.4	15.2	18.8	22.5	25.8	27.1	24.1	19.3	14.5	9.4	16.7
降水量	三島	48	97	147	182	138	228	206	200	227	177	123	78	1,851
	湯ヶ島	65	185	290	338	233	406	300	361	412	248	161	136	3,135
	土肥	49	107	184	208	170	210	205	229	226	187	103	87	1,965

3 就業構造

この地域の産業別就業人口の比率は温泉観光地という性格もあって、昭和45年度には第一次産業27.5%、第二次産業26.9%、第三次産業45.6%であったのに対して、昭和50年度は別表のとおり、第一次産業からとりわけ第三次産業への移行が目立っている。

中でも農業の低迷から昭和45年度より5カ年で農業人口は34%減少し、その約半数がサービス業へ流出していることが特色である。

第4表 産業分類別

分類 市町村	総数	第一次産業				第二次	
		農業	林業	水産業	計	鉱業	建設業
県全体	1,644,900	189,206	5,352	15,254	209,812	2,050	136,938
天城湯ヶ島町	4,551	689	131	6	826	127	432
修善寺町	8,879	977	18	6	1,001	8	788
中伊豆町	3,762	907	43	3	953	14	408
土肥町	3,754	657	14	132	803	160	420
戸田村	2,517	289	10	722	1,021	1	167
賀茂村	2,333	204	18	331	553	139	203
計	25,796	3,723	234	1,200	5,157	449	2,418

注) 上記以外の市町村については図幅内の面積が少ないため省略する。

資料：国勢調査（昭和50年度）

4 観 光

富士箱根伊豆国立公園は昭和30年に伊豆地区を追加指定して以来、わが国随一の利用者のある国立公園として親しまれてきた。

伊豆半島のほぼ中央部に位置する本図幅内においても、温泉、名所旧跡、その他観光資源は豊富で、53年度の観光入込客数は680万人に達している。地域内の主要交通体系は国道136号線（三島市—修善寺町—天城湯ヶ島町—土肥町—下田市）西伊豆スカイライン、伊豆箱根鉄道（三島市—修善寺町）の他、土肥町、戸田村から沼津、田子の浦、南伊豆に連絡する航路がある。

代表的観光地点としては、弘法大師空海ゆかりの修禪寺、伝説で知られる浄蓮の滝、天城山の火口湖でモリアオガエルの八丁池、天城のわさび田、佐渡の金山と並び称された土肥金山、断崖が黄かっ色の岩肌を見せる黄金崎等があげられる。又、本地域の観光にとって最も重要な資源である温泉は、戸田村を除く全域に分布している。中でも修善寺温泉の歴史は古く、名作文学の舞台としても全国に知られている。

就業者数

産業		第三次産業				分類不能	構成比		
製造業	計	小売業 卸売業	サービス業	その他	計		第一次	第二次	第三次
506,610	645,598	330,983	262,452	196,055	786,671	2,819	12.8	39.3	47.9
706	1,265	720	1,330	406	2,456	4	18.2	27.8	54.0
2,013	2,869	1,542	2,578	925	5,045	24	11.3	31.7	57.0
606	1,028	379	1,028	372	1,779	2	25.4	27.3	47.3
276	856	512	1,320	258	2,090	5	21.4	22.8	55.8
308	476	286	537	196	1,019	1	40.6	18.9	40.5
456	787	264	395	323	981	1	23.7	34.2	42.1
4,365	7,232	3,703	7,188	2,480	13,370	37	20.0	28.1	51.9

IV 主要産業の概要

1 農 林 業

本図幅地域の農林業の背景を見ると、立地、環境条件から修善寺町、天城湯ヶ島町、中伊豆町を主体とした中央山間部と、土肥町、戸田村、賀茂村等の西海岸部に二分され経営類型も異っているが、共通した特色としては、観光化が進展する一方、農林業の生産性が低いことから兼業化が進んでいることである。（農業専従者1人当たり生産農業所得、県平均963千円、本地域624千円）

各市町村の耕地、林野面積は別表に示したとおりで、耕地面積率は4%と県平均の13%に比べてはるかに低く、林野面積率は84%に達しており、山村地帯であることがうかがえる。

このような立地条件の特色を生かして、天城湯ヶ島町、中伊豆町、修善寺町ではブレイラー、養豚、生乳等の畜産物が米と共に農業生産額の主体をなし、その割合は40%～60%をしめている。

この地方の特産品である、わさびの栽培は、天城湯ヶ島町、中伊豆町に集中しており生産物の90%以上を調理用として東京市場に出荷している。(県全体作付面積並びに生産量119ha, 375t, 天城湯ヶ島町, 中伊豆町67ha, 157t)

一方、西海岸の土肥町では、カーネーション、キク等の花き栽培が盛んで、戸田村のミカン栽培、賀茂村のキヌサヤ、鶏卵等と共に農業生産額の40%~50%をしめる重要

第5表 耕地面積及び林野面積

区 分	県 全 体		天城湯ヶ島町		修 善 寺 町		中 伊 豆 町	
	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比
1. 耕地面積	103,000	13.3	424	3.2	545	7.9	490	4.5
田	37,800	4.9	250	1.9	304	4.4	297	2.7
畑	63,200	8.1	130	1.0	216	3.1	167	1.5
牧草地	2,000	0.3	44	0.3	25	0.4	26	0.3
2. 林野面積	502,900	64.7	12,249	91.8	4,893	70.8	9,241	83.9
民有林	409,200	52.6	6,835	51.2	4,238	61.3	6,540	59.4
国有林	93,700	12.1	5,414	40.6	655	9.5	2,701	24.5
3. 宅地その他	171,359	22.0	678	5.0	1,472	21.3	1,282	11.6
行政面積	777,259	100	13,351	100	6,910	100	11,013	100

資料：静岡県農林水産統計年報，昭和53年～昭和54年版

静岡県林業統計要覧

な産物として産地をなしている。

又、本地域は、椎茸の生産地として古くから知られており、県内生産量の39%を生産しているが、スギ、ヒノキ等の人工林が多くなったことから、原木に不足を生じて近隣市町村に原木も求めている現状である。

の概要（53年現在）

土肥町		戸田村		賀茂村		地域計		備考
(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	(ha)	構成比	
257	5.1	147	4.2	102	2.6	1,965	4.5	
99	2.0	31	0.9	41	1.0	1,022	2.3	
153	3.1	116	3.3	61	1.6	843	1.9	
5	0	0	0	0	0	100	0.3	
4,154	82.9	2,993	84.8	3,450	87.4	36,980	84.5	
3,859	77.0	2,969	84.1	3,225	81.7	27,666	63.2	
295	5.9	24	0.7	225	5.7	9,314	21.3	
605	12.0	388	11.0	394	10.0	4,819	11.0	
5,016	100	3,528	100	3,946	100	43,764	100	

第6表 主要農業粗生産額（53年現在）

区 分	県 全 体		天城湯ヶ島町		修 善 寺 町		中 伊 豆 町		
		構成比		構成比		構成比		構成比	
農業生産額	310,508	100	997	100	1,414	100	1,961	100	
耕 種	全 体	204,214	65.8	577	57.9	662	46.8	733	37.4
	米	41,371	13.3	244	24.5	358	25.3	310	15.8
	野 菜	56,350	18.2	278	27.9	168	11.9	312	15.9
	果 実	27,464	8.8	23	2.3	43	3.0	62	3.2
	花 き	10,505	3.4	0	—	29	2.1	2	0.1
	その他	68,524	22.1	32	3.2	64	4.5	47	2.4
畜 産	全 体	86,000	27.7	407	40.8	736	52.1	1,196	61.0
	乳用牛	14,330	4.6	19	1.9	324	22.9	83	4.2
	豚	32,941	10.6	103	10.3	211	15.0	393	20.0
	鶏	30,612	9.9	274	27.5	157	11.1	648	33.1
	その他	8,117	2.6	11	1.1	44	3.1	72	3.7
養 蚕, 加 工 物	20,294	6.5	13	1.3	16	1.1	32	1.6	
椎 茸 乾 (t)	675		33		67		125		
生産量 生 (t)	2,222		70		383		300		

資料：静岡県農林水産統計年報，昭和53～昭和54年版，静岡県林業統計要覧 昭和54

2 水 産 業

本図幅の西部沿岸に位置する戸田村，土肥町，賀茂村には土肥，宇久須の2港湾と，井田，戸田，八木沢，小下田，安良里の5漁港があり，沿岸，沖合，遠洋漁業の基地となっている。

主な漁業はかつお一本釣，さんま網，遠洋まぐろはえなわ，まき網，採草漁業等で，漁船規模は5t未満の小型船が8割以上をしめている。中でも戸田村は遠洋のかつお，まぐろ漁と近海のまき網漁が主体で，54年度漁獲量54,000t，水揚高約78億円で，対前

単位：百万円

土肥町	戸田村		賀茂村		地域計		備考
	構成比	構成比	構成比	構成比	構成比	構成比	
545	100	225	100	406	100	5,548	100
453	83.1	172	76.4	186	45.8	2,783	50.2
84	15.4	29	12.9	34	8.4	1,059	19.1
54	9.9	18	8.0	59	14.5	889	16.0
54	9.9	86	38.2	11	2.7	279	5.1
227	41.7	7	3.1	63	15.5	328	5.9
34	6.2	32	14.2	19	4.7	228	4.1
92	16.9	53	23.6	220	54.2	2,704	48.7
33	6.1	1	0.5	28	6.9	488	8.8
8	1.5	7	3.1	—	—	722	13.0
50	9.2	45	20.0	191	47.1	1,365	24.6
1	0.1	—	—	1	0.2	129	2.3
—	—	—	—	—	—	61	1.1
25		6		7		263	
4		2		14		773	

年版（林産物の椎茸は、生産額が明確でないため参考として生産量のみ記載した）

年比150%（漁獲量）となっている。

又、賀茂村は、遠洋漁業の基地として知られ、天然の良港といわれる安良里漁港を有している。安良里漁港はこれまでイルカ漁で知られていたが、最近ハマチ養殖に力を入れ、獲る漁業から育てる漁業に変ぼうしつつある。漁獲量については12,000tの90%以上はさんま、かつお、さば等で、沖合、沿岸漁業が中心である。

一方、土肥町ではあじ、いわし等の近海物と、天草などの海藻類をとる零細沿岸漁業が主体で、年間水揚高は約2億円程度である。

第7表 漁船，漁獲量の概況（53年現在）

区 分	動 力 船		漁 獲 量 属 人 (t)	水 産 加 工 生産量 (t)
	隻 数	ト ン 数		
戸 田 村	150	6,721	53,875	27
土 肥 町	92	315	2,248	3
賀 茂 村	76	1,014	12,272	110

資料：静岡県農林水産統計（昭和53～54年度版）

第8表 漁業別，漁獲量（属人53年現在）

区 分	賀 茂 村	土 肥 町	戸 田 村	摘 要
遠洋マグロはえなわ	233 ^t	— ^t	677 ^t	
かつお 一本釣	—	—	7,250	
	4,011	—	1,567	
まき網類	—	2,040	43,355	
さんま網類	5,333	—	772	
採貝，採草	8	105	39	
そ の 他	2,687	103	215	
計	12,272	2,248	53,875	

資料：静岡県農林水産統計（昭和53～54年度版）

3 商 工 業

本地域の商業は，全面積の8割以上を林野面積が占めていることからもうかがえるように，山麓に集落，商店が立地しているため，核となる商店街は見られない。

商店数は，食糧品小売業，飲食店が最も多く80%を占めている。これらの商店は全般的に小規模経営で，小売業の1店当たり売場面積は平均39㎡と，県平均の55㎡に比べてはるかに小さく，年間商品販売額についても3,100万円で，県平均8,400万円の37%にすぎず，大型店舗は修善寺町と戸田村にある八百半デパートのみである。このため買回品については三島市，沼津市などに購買力が流出している。

この中であって、修善寺町の商業活動は温泉地との結びつきが強くて、地元の消費購買力に支えられるよりも、観光客に負うところが大きい。戸田村においても同様で、観光を中心とした土産物店、飲食店が急激に増加している。

今後の方向としては商業と観光を一体に一層振興することが重要であるが、他方商店街の施設整備により地域内顧客の外部流出を防ぐと共に、周辺市町村からの消費拡大を図るべく積極的に取り組むことが必要である。

第9表 商業の概要

区分	商店数		売場面積		従業員数		年間販売額	
	51年	54年	51年	54年	51年	54年	51年	54年
市町村	店	店	m ²	m ²	人	人	万円	万円
天城湯ヶ島町	199	184	7,364	7,085	555	527	364,471	348,905
修善寺町	470	501	12,613	15,645	1,537	1,595	1,546,108	1,928,662
中伊豆町	113	109	2,397	2,459	297	274	186,526	189,858
土肥町	221	229	5,414	4,673	635	635	432,054	1,127,939
戸田村	169	189	2,933	4,234	422	515	282,524	397,064
賀茂村	132	134	3,272	3,467	258	256	154,157	189,337
計	1,304	1,346	33,993	37,563	3,704	3,802	2,965,840	4,181,765

資料：静岡県商業統計調査

又、工業は平坦地が少ないこの地域では、大規模な工場の立地が困難なため、小規模の工場が多く、従業員数30人未満の工場が全体の93%と圧倒的に多く、30人以上の工場はわずか18工場で、そのうち100人以上は3工場にすぎない。

従業員数を産業別に見ると、家具、装備品関係が12%を占め最も多く、非鉄金属、輸送機械関係がそれぞれ10%で続いている。この3年間における推移は、修善寺町が1.34倍と最も伸びを示し、天城湯ヶ島町では0.7倍と減少している他は横ばいである。

又、製造品出荷額は非鉄金属が16%を占め、輸送機械関係15%、家具、装備品12%で続いている。なお、地域全体出荷額284億円の49%に当たる140億円を修善寺町で占めている。

第10表 事業所の概要

区分	事業所数		従業者規模別				従業者数		製造品出荷額	
			1~29人		30人以上					
	51年	54年	51年	54年	51年	54年	51年	54年	51年	54年
市町村	カ所	カ所	カ所	カ所	カ所	カ所	人	人	百万円	百万円
天城湯ヶ島町	29	29	25	26	4	3	542	379	2,915	3,427
修善寺町	64	103	58	97	6	6	1,057	1,416	7,382	13,951
中伊豆町	23	23	22	22	1	1	263	267	1,786	2,253
土肥町	27	27	25	25	2	2	257	255	1,238	1,820
戸田村	46	47	44	45	2	2	334	345	1,792	2,071
賀茂村	27	30	24	26	3	4	479	527	3,182	4,906
計	216	259	198	241	18	18	2,932	3,189	18,295	28,428

資料：静岡県工業統計調査

第11表 産業別・事業所数、製造品出荷額の概要

区分	修善寺町		土肥町		戸田村		天城湯ヶ島町	
	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出荷額
食料品	10	27,278	6	21,410	5	9,687	10	49,583
木材、木製品	5	77,399	5	24,622	1	x	8	66,505
家具、装備品	16	342,900	2	x	4	4,732	—	—
非鉄金属	9	405,157	—	—	—	—	1	x
金属製品	13	83,941	4	5,585	16	115,632	2	x
一般機械	15	237,988	—	—	2	x	—	—
電気機械	10	16,471	1	x	1	x	4	13,121
輸送機械	2	x	5	15,402	13	25,053	2	x
その他	23	203,950	4	114,996	5	51,992	2	213,535
計	103	1,395,084	27	182,015	47	207,096	29	342,744
構成比		49%		6%		7%		12%

資料：静岡県工業統計調査

注) xは秘匿のためその他に集計金額が記入し

一方、鉱業関係では、現在2企業によって金、銀、並びに硅砂の採鉱が行なわれている。土肥町新田地内の清越鉱山では金、銀の採鉱が古くから行なわれ、現在も年間約3万8,000tを採掘している他、賀茂村においてもガラスの原料となる硅砂の採掘が盛んで最近では碎石企業の進出もめだっている。しかし天城湯ヶ島町の持越鉱山では伊豆大島近海地震二次災害元となったこともあって、現在は鉱石からの金、銀生産は行なっていない。

(昭和54年現在) 単位：万円

中伊豆町		賀茂村		計		構 成 比	
事業所	出荷額	事業所	出荷額	事業所	出 荷 額	事業所	出荷額
5	17,776	7	7,729	43	133,463	17	5
3	12,308	4	18,036	26	198,870	10	7
1	x	1	x	24	347,632	9	12
3	53,416	—	—	13	458,573	5	16
2	x	—	—	37	205,158	14	7
—	—	2	x	19	237,988	7	8
4	114,586	3	5,046	23	149,224	9	5
3	4,374	3	375,966	28	420,795	11	15
2	22,865	10	83,852	46	691,190	18	25
23	225,325	30	490,629	259	2,842,893	100	100
	8%		18%		100%		

である。従って産業別の合計金額は実数ではない。

各 論

1 地形分類図

1 地形の概要

修善寺図幅にふくまれる地域の地形は、天城山地に源流をもつ狩野川が北流する谷筋をはさんで、東部は多賀火山地、天城火山地、天子火山地などからなり、西部は西斜面を駿河湾にむける達磨火山地、棚場火山地、猫越火山地などの西伊豆火山群と、伊豆半島の基盤である第三紀層の湯ヶ島層、白浜層などの地層からなる山地とからなる山地が面積のほとんどもを占めている。

東部の山地のうち、狩野川の支流大見川以北の多賀火山地は、沼津図幅からの延長が稜線としてはいりこんでいる火山地である。天子火山地、天城火山地ともに第四紀に活動した火山で、湯ヶ島層の上のっている。侵食の進行した部分や周辺には、基盤岩石の地層が露出しているし、新しい時代に噴出した溶岩流からなる溶岩台地状の地形もみられ、活動のあとをたどることもできる。表面には火山灰が堆積している場合がおい。大見川はそれらの間を侵食して北流し、のちに西方にむきをかえるが、沖積地とともに小規模な段丘を形成する場合もあり、構造運動の影響をうけることもある。

西部の井田火山をふくむ達磨火山地、棚場火山は第四紀の活動による火山であるが、猫越火山は第三紀末の鮮新世の活動であるために解体のすすんだ山体であり、地質図によると、基盤の湯ヶ島層の分布も広がっている。これらの西伊豆火山群は、東側は緩斜面、西側は急斜面をもつ山体で非対称斜面である。また、東側の直線的侵食谷に対し、西側は樹枝状放射状の侵食谷で、侵食型も対照的である。これは西側に火山体の噴火口が位置して、その谷壁斜面の地形や、岩石も変質をうけていることに由来しているといえる。

宇久須川流域山地と小下田一带は古い火山岩や第三紀層からなりつつために、山地として区分した。小下田付近は緩斜面が水田化されているが、滑落崖をもつ地すべり性の崩壊地もみられ、押し出しや変形による地形である。

駿河湾に面する海岸にそっては急崖をもつ海食崖と、中小河川の河口付近に発達する小沖積地に特色がみられる。とくに戸田と土肥の間の海食崖は規模も大きく、傾斜の変換も明瞭である。河口付近の沖積地は小規模であるが、海岸には砂礫洲が発達している。

中央の狩野川低地の上流は、溶岩流が谷底を埋積した台地状の地形もみられ、峡谷や滝も発達している。湯ヶ島から下流は谷底低地の巾も広くなり、沖積地とやや高い何段かの

段丘が複雑に分布している。段丘と山麓の崖錐状の緩斜面とは漸移的に移行している。修善寺から大仁までは沖積地も広くなり、流路をかえながら地形を形成してきたが、平野に面する山地の末端には段丘堆積物のみられる場合もおおい。

2 地形区

本図葉の地形区については、海拔高度、起伏量、谷密度、傾斜分布、地形面の特性、構成物質、地域的なまとまりなどを基準にして、次のように区分をおこなった。

Ⅰ 山地	a 葛城山地	
	b 西豆山地	
	c 宇久須山地	
Ⅱ 火山地	a 多賀火山地	
	b 天子火山地	
	c 天城火山地	
	d 達磨火山地	
	e 棚場火山地	
	f 猫越火山地	
Ⅲ 低地・台地	a 伊豆西海岸小低地群	1 戸田大川下流低地
		2 土肥大川下流低地
		3 土肥山川下流低地
		4 八木沢大川下流低地
		5 宇久須川下流低地
	b 狩野川流域低地・台地	1 狩野川流域低地台地
		2 大見川流域低地台地

3 地形分類

葛城山地（Ⅰa）

狩野川と山田川にはさまれた山地を葛城山地（Ⅰa）とした。この地域は沼津図幅の静浦山地の葛城山地の延長の部分であり、内浦安山岩類や湯ヶ島層群の凝灰岩類からなる山地であり、大仁では安山岩の岩脈が突出している。急斜面とこまかい水系をもつ起伏量の大きい山地であって特異な景観をもつ。小室や後山では石材の採石がおこなわれている。

西豆山地 (I b)

西豆山地は、八木沢の谷から宇久須に至る間の小下田を中心とする地域で、駿河湾側に突出する山地であり、旧村名の西豆をとって西豆山地 (I b) とした。この地域は白色凝灰岩類の火山碎屑岩類凝灰質砂岩と頁岩および小下田安山岩類からなり、岩石的にも他と区別される山地である。地形的特色として、地形図にも表現されているように、水田、平坦地池沼などがおおく、コンターの不規則な乱れのみられることから、地すべり性崩壊や押し出しによって形成された地形ともみられる。また、地すべり性滑落崖や崩壊性土砂の堆積などの存在から、それらの作用の集積としてできた地形である。傾斜分布をみても緩傾斜地が広く、上野、藤沢、小峰などではそれが地形的特性にもなっている。階段状の水田耕作は地下水の湧出のおおいことを示す地すべり地の景観の特色であるが、第三紀層の粘土化にともなう作用とも考えられる。

宇久須山地 (I c)

宇久須川流域の山地を宇久須山地 (I c) とした。地質図によると、玄武岩安山岩火山碎屑岩および砂岩からなる地域で、湯ヶ島変朽安山岩類にぞくする。粘土化、珪化作用のいちぢるしい地域で、変質作用をうけており、侵食もそれにもなって進行し、一般に急斜面をもつ大起伏山地である。水系は宇久須川を中心に赤川、大久須川にわかれ、放射状と樹枝状のパターンをもって開析している。谷も深く谷頭部は急傾斜地なるが、大洞山から仁科峠にかけての稜線は平坦面も分布する。大洞山から大洞峠にかけての稜線上、赤川上流域には珪石採取地があり、山地がきりとられて採掘がすすみ、人工改変地となっているが、崩壊の危険性もはらんでいる。駿河湾に面する黄金崎一帯は海食崖をなして観光地となっているが、銅鉱床の鉱脈もみられた。

多賀火山地 (II a)

図幅の北東端に多賀火山地 (II a) が分布する。多賀火山地は箱根、湯河原火山の南につづく更新世の火山で、東半は侵食で失われているが、西半は原形が保たれており、その一部が本図幅内にあらわれている。湯ヶ島層群を基盤にして陸上に噴出した火山が安山岩や玄武岩質溶岩、火山角礫岩からなる。また、凝灰岩類は風化して軟弱な黄褐色土となる。平行する尾根が南西方向にのび、尾根の上の平坦面は畑地や白岩付近では別荘地に利用されており、尾根の末端や谷壁は急傾斜となっている。また大仁や牧之郷のあたりでは段丘礫層をのせている。古川や年川などの谷底は広く、水田化しているが、勾配は比較的大き

い。また集落は崖錐状の平坦面上に立地している。西川にそって断層が走り、年川から大野方面にも断層が通じているため、構造的に変形や運動の影響をうけている。

天子火山地（Ⅱb）

天子火山地（Ⅱb）は天城火山の北方に位置し、天城火山の活動以前に200～300mの高さの基盤の上に噴出した古い成層火山であり、608mを最高点とする。北と東は大見川、南は国土峠付近で天城火山に、西は狩野川でさかいされる範囲である。北西方向に開く直径約600mの火口をもつ火山で、山体は著しく解体されている。安山岩質の溶岩を主とし変質した凝灰角礫岩をはさむが、安山岩には板状節理がよく発達している。北部にた300m前後のところの緩傾斜地がひろがり、ゴルフ場や別荘地に改変され、早霧湖は人工湖で、かんがい用水源となっている。日向湖ともいわれる。山体の周辺は急斜面でかこまれるが谷が下刻によってはいりこみ、田沢川や矢熊沢にはおおくの転石もみられる状況である。山地内には加殿断層、姫之湯断層、原保断層などの断層がとおり、構造的に変位をうけている地域でもある。表層は火山灰でおおわれている。

天城火山地（Ⅱc）

天城火山地は標高1406mの万三郎岳を中心とする火山で、伊豆半島の中でも雄大な火山体である。更新世に活動した火山で、ほとんど安山岩質の溶岩からなる楯状火山、成層火山であるが、基盤は400～900mの高度をもっている。図幅にふくまれる白田川上流の堰口川ぞいの急傾斜地は侵食された火口であり、硫気作用のために粘土化した岩石であるために、崩壊や侵食が進行した。図幅にふくまれる天城山脈の稜線にそって八丁池、カワゴ平などの凹地があり、いずれも側火口であって溶岩を流出させた。稜線の北側と南側では傾斜分布が対照的で、地形の変化を示している。八丁池から西方と北方には緩傾斜面がひろがるが、これは側噴火による流出した溶岩からなる台地の地形をなしている。狩野川とその支流による侵食がすすんで、深く峡谷状の地形となっている。直径約800mの火口をもつカワゴ平から噴出した軽石質泥流層は約2800年前の活動であるが、巾500～1000mをもって標高1100mから500mほどに達して地形分類でも溶岩流地として区分した。筏場付近まで達し、それは軽石質泥流として大見川ぞいの地形に影響を与えたと同時に、軽石質の火山灰や砂礫を放出し、浄蓮滝付近で60cm以上に達する。溶岩流地の表面は岩石が露岩として地形図に表記されているが、軽石流の流下にとまなう起伏が水系の発達のもととなり、それは不連続である。天城火山の周辺には寄生火山のいくつかがみられるが、本図幅

内の代表的なものは、浄蓮滝東南方にある鉢窪山である。標高674mの頂上には直径150mの噴火口跡もみられ、円錐形の岩滓丘であり、柱状節理の発達する玄武岩がみられる。岩滓丘としてはこのほかに標高938mの丸山、長野部落の北側の小丘などが示されているが不明である。しかし、丸山については露頭により、溶岩層を介入するスコリアドームであると判定されている。水系は放射状に発達し、下刻をすすめているが、流路ぞいの山腹に急傾斜がみられ、原面をむしばむ幼年期的な谷の発達がうかがわれる。天城火山は何回かの活動の段階をへて火山体が形成されてきたことが、地形にも表現される点で特異であるが、それらと地形発達との関係は問題として残されている。

達磨火山地（Ⅱd）

達磨火山は標高982mの山頂を中心とする大きな楯状火山で、山体の西半分の解体と東半の侵食形とが対照的であるが、一括して達磨火山地（Ⅱd）とした。構成岩石は安山岩質溶岩で、火砕物をほとんどもっていない。地質図によると北西端の井田周辺を井田火山としてあつかっているが、これは溶岩と火砕岩との互層からなる古い成層火山で、達磨火山におおわれている。火口は戸田大川ぞいの新田東南付近とされており、火道集塊岩もみられるが開析されていて、不明な点もおおい。また、戸田湾は地形的に爆裂火口であるとも考えられていた。真城山から山頂につづく稜線の東側と北側は、原面ともいえる裾野の緩斜面が放射状にのび、水系も放射状に下刻をすすめている。北部の広野、河内付近は西浦からのみかん園の延長で農業的土地利用がみられる。柿の木川、修善寺川は、直線的にのびる谷で谷底平地もひろがり、流路にそっては転石もおおい。稜線ぞいは緩斜面で、開析はおくれるが、山腹に崩壊地などもみられる。真城山周辺は水系、山系とも複雑であるが、断層などにより構造的に変位をうける場合もある。井田集落は砂礫洲で閉塞された沖積低地と崖錐堆積物からなるが、閉塞による埋めたての不十分な所は池沼として残っている。火口ともされる新田周辺は複雑な地形となり、堆積段丘、崩壊性押し出し地形、山麓の崖錐状地形などが交錯している。西斜面の末端は駿河湾に面するが、長大な海食崖を形成し、比高700mにも達し、崩落もつづいている。舟山は侵食と地すべりの押し出しによって形成された堆積地で、海岸は礫浜となっているが、みかん園がひろがっている。舟山から北にのび戸田にぬける谷は構造谷と考えられているが、達磨山周辺は類似のいわゆる重力型断層による地塊状滑落が指摘されている。稜線にそう緩斜面は伽藍山付近で広く平坦面を示すが、水系の方向性に異常があり、水系をもとにした地形の分析が必要となる。

棚場火山地 (Ⅱe)

達磨火山地の南部に位置する火山地で、地形的な境界の判定が困難であるために、地質図をもとにその範囲をきめて棚場火山地 (Ⅱe) とした。標高653mの棚場山を中心とする地域で、清越鉾山東方にきれいな円形の直径1.5kmにおける爆裂火口を残す成層火山である。岩質は安山岩であるが、火砕物はかなりふくまれている。火口付近は侵食され、達磨山と同じく東西の斜面の地形は対照的であるが、東側は達磨山より古い火山であることもあって開析はすすんでおり、平坦面の残り具合はすくなく、傾斜も大きくなる。古奈川、船原川の水系のパターンも達磨山とはことなっている。清越鉾山のある新田を中心として放射状に発達する水系によって解体がすすんでいる。平石、天金などは地すべり性の滑落崖と堆積をもつ地形となっている。土肥周辺の山地は樹園地がおおくなり、基盤の湯ヶ島層の露出する山地となるが、ひとつの単位にふくめた。船原川にそう上船原の平坦地は玄武岩質岩滓丘で完新世の活動とみられる。これは円錐丘から流出した溶岩によってできた段丘状の平坦地となり畑地となっている。

猫越火山地 (Ⅱf)

棚場火山の南につづく山地で、北東に開いた火口をもち、鮮新世の火山噴出物と推定される安山岩類からなる地域である。古い火山地として猫越火山地 (Ⅱf) としたが、山地に分類すべきかもしれない。仁科峠から猫越峠へと分布する広い平坦面に特色があるが、侵食はすすみ、水系も複雑となる。猫越川、持越川が山体を開析する、流路ぞいには低地と小さい段丘がみられる。持越鉾山南方の平山付近には平坦地がいくつかみられ、特異な形態をもっている。1978年、伊豆大島近海地震にあたっては、ほうずきにあった鉾山の鉾滓堆積場が破堤して鉾滓が流出して問題となったように、人工的改変もみられる。これらの地形は地すべり地形で、平山の南側の急崖を滑落し、移動した移動丘もみられる。このような巨大地すべり地形では小起伏がおおきく、その凹地は湿地や池沼となり、そのひとつが鉾滓堆積場となっていた。この地すべりにあたっては、下部の湯ヶ島層群とその上にのる猫越石英安山岩類と凝灰岩層との間ギャップとなって地すべり地形を形成しているといわれる。また表面には、ロームやスコリアが堆積してゐる。開析された西斜面は宇久須川流域山地として別に分類したが、猫越火山一帯は西斜面は滝の分布や三角末端面、破砕帯などから断層が交差することが予想されているし、構造的に特色のある地域でもある。

伊豆西海岸小低地群（Ⅲa）

駿河湾にそそぐ西伊豆の河川は、いずれも小規模であるが、河口付近には沖積低地を発達させている。北部から戸田大川下流低地（Ⅲa1）、土肥大川下流低地（Ⅲa2）、土肥山川下流低地（Ⅲa3）、八木沢大川下流低地（Ⅲa4）、宇久須川下流低地（Ⅲa4）、と区分した。

御浜崎にかこまれた戸田港の奥に河口をもつ戸田大川下流の沖積地は、浜堤によって閉塞された低地の埋積によってできた低湿な低地と、東部の高燥な河谷低地に区分できる。河川改修と土地改良、海岸の護岸と築港などによる人工的改変の結果、状況は変化しているし、宅地化、市街地化が進行している。新田付近には開析や、堆積のすすんだ緩傾斜があるが、河谷低地の上限である。沖積地には河川とともに南北の山地からの小支谷からもたらされた物質もおおいといえる。河川は天井川の性質を下流部ではもち、後背湿地もみられる。

土肥大川は小土肥、黒根の水田地帯となる沖積地を形成したが、海岸には砂礫の浜堤がみられ閉塞をおこなった。規模は小さいが、ひとつのパターンを示している。

土肥山川下流の沖積地も類似の形成過程をもつ。松原の海岸の砂浜は広いが、沖積地の市街地化をすすんでいる。港湾築構にともなう海岸線付近の改変はいちぢるしい。河川の原形は天井川を示すから低地は盛土などによったのであろう。

八木沢大川下流低地は水田が広く残る沖積低地で、海岸ぞいの浜堤上に集落をのせている。周辺の小支谷からの押し出しによる扇状地性の低地に移行する。海岸ぞいには湿地や池が残っており、洲の発達によって閉塞されたものであろう。砂礫や巨礫からなる海岸には防潮堤がつくられている。上野の緩斜面は地すべりの押し出しによるものである。

宇久須川下流低地も水田が広く残る沖積低地であり、南部は不動尊川の一つの低地となる。低平な沖積地で海岸砂堤の閉塞作用は他の低地と同様である。

これらの低地に共通した性質をあげると、いずれも小規模であるが、水田化されていること、海岸ぞいに浜堤が発達して閉塞をすすめて平野が形成されてきたこと、河川の流路は低地の北側に偏っていること、低湿な沖積低地と周辺山地からもたらされた砂礫による高燥な低地とからなることなどがあげられる。なお、これらの小低地はいずれも地震の津波によって被害をうけてきた過去をもつことも共通した性格である。防潮堤の構築によって防災対策がとられているが、湾奥低地は地形的に津波の常習被災地であり、微地形や土

地利用のこまかい実態にそくした調査と対策の必要な地域でもある。

狩野川流域低地台地（Ⅲb1）

狩野川にそう低地と台地とを一括して、狩野川流域低地台地（Ⅲb1）とした。局地的に変化にとむ特色をもつために、まとめにくい性質であるが、上流から狩野川にそう低地と台地の地形をおってみたい。湯ヶ島温泉から上流は溶岩流の流下によって埋められた地形をもち、河川は下刻をして峡谷状をなすが、浄蓮滝にみられるような遷急点をもつ。緩傾斜の台状の地形が階段状に下流にのび、表面は火山灰でおおわれるが、水田化がすすんでいる。支流の長野川ぞいの長野付近は広い緩斜面をもつ溶岩流と表面の堆積物からなる地形であるが水田化されており、与市坂も同様な性質をもつ。猫越川ぞいにもせまい段丘や崖錐状緩斜面が発達している。湯ヶ島から青羽根のあたりまでは低地の巾もせまいが、沖積低地と小さい段丘がみられ、流路は下刻をしている。北野原、矢熊などは田沢川、矢熊沢の出口にあたり、小扇状地性堆積地と沖積地が結合した地形となり、川ぞいには流路の変遷を示す小崖による段丘化のあとも知られる。雲金より下流は川中とともに低地台地の巾もひろがり、沖積地と砂礫台地とが交錯するが、段化は困難である。大平、木立野、佐野などは段丘上の集落であり、流路の屈曲は岩石的に制約され、攻撃斜面の側刻も激しいが改修もすすんでいる。全般的に段丘の段化と対比、編年は資料不足であるために砂礫台地は一括した。大見川と合流したあとは、柏久保、牧之郷、大仁などに段丘が発達する。沖積地を曲流しながら北流する本流にそう熊坂付近は、狩野川台風の被害の大きかった流失地域であったが、そののちの改修により河状と河相は大きく変化した。

大見川流域低地台地（Ⅲb2）

図幅には大見川上流部と支流の地蔵堂川ぞいと、下流の低地台地がふくまれるが、下流部の狩野川に合流するまでを大見川流域低地台地（Ⅲb2）とした。地蔵堂川ぞいは溶岩流が谷にそって流下し、溶岩台地状の平坦地形であり、そこを河川が流れるので、万城の滝のような遷急点がつくられている。地蔵堂は袋状の砂礫質堆積地であり、階段状に水田化がすすんでいるが、河川は下刻をおこない、小段丘も周辺に付着している。大見川上流の新田から姫の湯にかけて埋積低地であるが、下刻による段丘もみられる。しかし筏場から新田にかけての左岸には軽石流と軽石質砂礫からなる平坦地が広くみられ、筏場段丘堆積物とよばれているが、火山活動に由来する特殊な事例であろう。下流にのびるにしたがって砂礫質段丘に移行する。1958年、狩野川台風の洪水時の激流によって流路が短絡化した

箇所もあり、大きな被害を下流に与えたが、そのあと改修がすすめられた。

上白石から狩野川合流点までは500～700mほどの巾をもつ低地台地となり、平川までは南流してきた西川の低地と平行するが、その間は起伏のある台地状地形を示す。流路にそって旧流路の凹地、曲流のあとの攻撃斜面、沖積低地とともに段丘地形もみられ、水田化のすすんでいることもあって段化は困難であるが、微地形にとんでいる。流路は一般に下刻した位置をとっている。周辺の山地との関係を見ると、傾斜の変化は顕著であるが、崖錐性堆積物におおわれる部分に集落は立地し、小川付近は山麓の緩斜面が広く段丘をおおようになるが、地すべり性地形でもある。なお狩野川ぞいとともに段丘の段化と対比は今後の問題である。

4 超 伏 量 図

起伏量は国土地理院発行、縮尺5万分の1地形図の各辺を20等分してえられる各方眼内の、最高点と最低点との標高差を、下記の階級区分によって表示したものである。各階級の分布とひろがりをもとにして、山地や火山地、山麓などの地形分類および地形区分図の基準とした。

- 0 : 50m未満
- 1 : 50～100m
- 2 : 100～150m
- 3 : 150～200m
- 4 : 200～300m
- 5 : 300～400m
- 6 : 400～500m
- 7 : 500m～

		3	5	4	4	5	4	4	4	3	2	4	3	4	1	2	3	3	2	
		5	5	5	5	5	5	4	4	3	3	3	4	2	1	2	3	3	3	
	3	5	5	5	5	4	4	4	4	4	4	4	3	2	3	2	3	2	3	
	2	4	5	5	5	6	4	4	4	4	4	3	2	2	3	2	2	3	2	
	4	5	5	4	5	6	4	4	4	4	4	3	4	3	3	3	3	2	2	
	5	4	5	5	5	6	5	4	5	4	4	2	2	4	1	3	3	4	4	
	5	5	5	5	5	6	5	5	4	4	4	3	4	3	4	4	3	4	4	
		5	4	5	5	5	3	5	5	4	4	4	2	3	4	4	3	4	4	
		5	5	5	6	6	5	4	5	4	4	4	4	3	4	5	4	3	4	
		3	4	5	5	4	4	5	4	4	4	5	5	3	4	4	4	4	3	
			4	5	4	5	5	5	2	3	3	3	3	4	3	3	1	4		
		1	4	4	4	6	6	3	4	4	4	2	2	4	3	2	4	3		
	0	4	5	4	5	6	5	4	4	3	3	3	4	3	4	4	4	2	4	
0	3	4	6	6	6	6	6	4	4	3	3	3	4	3	2	5	4	3	4	
1	5	4	6	5	6	5	4	5	4	3	4	4	4	4	4	5	3	3	5	
2	5	4	4	4	5	6	4	4	5	4	5	4	4	4	5	5	5	3	5	
2	4	5	5	5	5	7	4	4	4	4	5	4	3	5	4	5	6	4	5	
		4	4	5	4	5	6	5	4	4	6	6	6	6	6	4	5	4	3	5
		1	3	4	5	6	6	5	6	4	4	6	5	5	5	3	4	5	5	6
		4	5	6	5	6	6	6	4	6	6	4	4	5	4	5	5	4	6	6

<起伏量図>

5 道路と河川

国道 136号

主要地方道

沼津土肥線，修善寺戸田線

伊東修善寺線，修善寺下田線

伊東西伊豆線

有料道路 西伊豆スカイライン

一級河川

狩野川水系……山田川, 小山田川, 修善寺川, 湯舟川, 修善寺深沢川, 柿木川, 奥山川
船原川, 数沢川, 吉奈川, 持越川, 猫越川, 長野川, 入洞川, 田沢川, 下り沢川, 嵩
田川, 大見川, 古川, 年川, 大見西川, 中伊豆山田川, 梅木川, 地藏堂川

二級河川

宇久須川, 大久須川, 赤川, 八木沢大川, 松原川, 火振川, 横瀬川, 清越川, 山川,
水口川, 小土肥大川, 大川, 井田大川, 沢海川, 古宇川, 立保川, 西浦河内川

(北川光雄)

<文献>

- 沢村孝之助(1955) 5万分の1地質図、修善寺、および説明書 地質調査所
静岡大学理学部地学教室(1973) 静岡県地質図および説明書 静岡県
国土地理院(1979) 1978年伊豆大島近海地震災害調査報告書
静岡県(1974) 静岡県地震対策基礎調査報告書—伊豆地域—
静岡県出版文化会(1978) 静岡の地学 静岡教育出版社
星野通平他編(1972) 伊豆半島 東海大学出版会
大久保武彦(1975) 伊豆半島地形研究備忘録 早稲田大学学術研究生物地学編 24
久野久(1938) 伊豆遠磨火山について(英文) 震研彙報 16
黒田直ほか(1970) 伊豆高塚山船原火山の地質と岩石 静大地学研究報告 2
金子史郎(1972) 地形図説2 古今書院

Ⅱ 表層地質図

総論

本図葉は伊豆半島の北西部にあたり、新第三系とその上をおおう洪積世火山群とがつくる山地が大部分を占める。狩野川と支流沿いには礫質の狭い沖積地と段丘群が発達する。駿河湾沿岸には溺れ谷を埋積した狭い沖積平野が分布する。

新第三系は火山物質に富み、熱水変質作用の著しい湯が島層群（おそらく初期中新世）と一般にあまり変質作用を受けていない白浜層群（中期中新世～鮮新世）にわけられる。両者は不整合関係にあると考えられるが、後の火山作用、変質作用、断裂構造のため各々の詳しい層序は未だ充分明らかではない。

新第三系をおおう洪積世火山体としては、狩野川谷の西側に北から、井田火山、達磨火山、それに鮮新世とされる火山岩類、一方、東側に北から、多賀火山、天子火山、天城火山の各々がある。何れも安山岩一玄武岩であるが、天城火山では沖積世になって寄生火山によるスコリアや流紋岩の活動があった。

1 未固結堆積物（沖積平野をつくる地層）

沖積地は狩野川本支流沿いと駿河湾沿岸に分布する。狩野川本支流沿いでは、山間の谷底平野であるため、構成層はほとんど礫層であるが、修善寺より北方では本流の谷巾が広くなると共に、砂泥のはさみが多くなる。駿河湾沿岸では、北から、井田、戸田、小土肥土肥、八木沢、宇久須の各地で山麓の溺れ谷の埋積した狭い低地が発達する。構成層は礫層を主とするが、海岸に沿って砂嘴がのび、その内側を砂泥層が埋積した形態を示す。戸田では現在の湾口にも砂礫嘴がのびる。

本区域の湯が島層群は熱水変質作用、断裂構造の発達のため風化作用、粘土化作用がすみ、ところによってはきわめてもろくなっている。このようなところでは崩壊や地すべりが生じやすい。

本区域にはまた、南北から北西一南東の走向を持つ活断層が、特に達磨山付近と修善寺東方に雁行して発達する。このうち、修善寺東方のいくつかは1930年の北伊豆地震の際に地震断層として活動した。

2 半固結堆積物

軽石流堆積物：天城火山の寄生火山であるカワゴ平の活動に伴った堆積物で、特に筏場

では段丘礫層上に厚く堆積している。

砂礫質段丘堆積物：狩野川の本流と支流沿いに数段の段丘をなす。いずれも主として礫層から成る。

城層：修善寺東方の下大見付近に分布し、凝灰角礫岩、凝灰質砂岩、とそれをおおう玄武岩から成る。城南方に分布する海成砂岩層は従来城層に含まれているが、ここでは同砂岩層は白浜層群の一部と考えている。しかし、含有化石から見ると洪積世に属し、白浜層群とは別の地層になる可能性もある。

3 団結堆積物

白浜層群：湯が島層群より新期の凝灰質砂岩、火山碎屑岩、火山岩類を一括してある。しばしば貝化石や大型有孔虫の *Nephrolepidina* を含み、浅海の堆積物と考えられる。すでに述べたように、一般的には変質作用を強く受けていないが、ところにより変質して粘土化がすすんでいる部分がある。構造はほぼ水平ないし、ゆるく傾く。

湯が島層群：熱水変質作用を受けた変朽安山岩類、緑色凝灰岩類、緑色凝灰質砂岩を一括したもので、緑色の火山碎屑岩を主体とし、浅海成の凝灰質砂岩、凝灰質シルト岩をはさむ。本図葉中の湯が島付近にその模式的な岩相が露出する。変質作用により、しばしば鉱化作用、粘土化作用を受けている。

4 貫入岩類（固結岩類）

湯が島層群も白浜層群も共に多くの貫入岩体に貫かれているが、これらのうち大規模な岩体をなして分布する石英安山岩体を本図葉に彩色してある。

5 火山岩類（半固結岩類、固結岩類）

カワゴ平火山噴出物：天城火山の寄生火山としてカワゴ平火口から多量の軽石流が噴出、続いて石英安山岩質溶岩が流下した。埋没木片の¹⁴C年代は2830±120。

スコリア：天城火山に伴う岩滓丘として顕著な天城火山西麓の鉢窪山、比高 220m、と船原の比高100mの円錐丘を挙げてある。

寄生火山溶岩：天城火山の寄生火山の溶岩流で、当時周辺の河谷底を流下し、現在は段丘状の地形を呈する。すべて玄武岩から成る。

天城火山本体溶岩：天城火山は伊豆半島で最大の火山であるが、本図葉南東隅にその4が見られる。ほとんど安山岩溶岩から成る。厚さは400~600m。

天子火山噴出物：安山岩質溶岩を主とし、その下部に凝灰角礫岩をはさむ。一般にやや

変質し、もろくなった部分がある。

多賀火山噴出物：本図葉の北東隅にその一部分が分布する。安山岩及び玄武岩とそれらをおおう凝灰角礫岩から成る。

達磨火山噴出物：ほとんど安山岩質溶岩からなる楯状火山。厚さは約500m。

井田火山噴出物：本図葉北西隅にその一部分が分布する。玄武岩及び安山岩の溶岩と凝灰角礫岩から成る成層火山。

鮮新世火山岩類：本図葉南部の猫越峠付と棚場山周辺近に分布する、僅かに火山地形を残す岩体は猫越火山、棚場火山とも呼ばれる。前者は主として石英安山岩及び凝灰角礫岩から成る。持越鉾山付近では鉾化作用の影響を受け、また、凝灰角礫岩はもろくなっている。後者は安山岩溶岩と凝灰岩・凝灰角礫岩から成る。変質して軟弱な部分がある。

このほか、大仁東方に安山岩及び凝灰角礫岩が分布する。この凝灰角礫岩も変質してもろい。

(土 隆 一)

<文献>

北村信ほか6名(1969)伊豆半島の地質学的諸問題, 東北大地質古生物教室邦交報告, 68, 19-31

鮫島輝彦ほか4名(1968)伊豆半島の地質に関する諸問題。"フォッサマグナ"日本地質学会総合討論会資料, 87-92

土 隆一編(1974)1:200,000 静岡県地質図, 及び静岡県の地質, 154pp. 静岡県

Ⅲ 土 壤 図

1 岩石地

土壌層がなく、基岩が露出している。本図幅では修善寺町城山の南東斜面および西海岸の急峻な海食崖地帯に分布する。

2 残積性未熟土壌

多少にかかわらず侵食の影響がみられる(A)・Cまたは(A)・BC・C断面をもつ土壌である。一般に(A)層の発達は弱く、下層に砂礫質のC層がくるものが多い。これに属する土壌統のうち、東原統は、火山灰と固結火成岩の風化混合物を母材とするもので、山地斜面下部に分布し、普通畑に利用されている。月ヶ瀬宿統は、山地斜面の下部に分布し、極暗褐色を呈する細粒質堆積物を母材とするもので、普通畑、樹園地として利用されている。上船原新田統は下層に砂礫質、礫層(軽石層)をはさむもので、山地斜面に分布し、普通畑に利用されている。上船原温泉統は、山地斜面下部に分布し、細粒質暗褐色堆積物の下位に粘性の強い褐色の層が来るもので、主に普通畑として利用されている。

3 粗粒残積性未熟土壌

多少にかかわらず侵食の影響がみられる(A)・Cまたは(A)・BC・C断面をもち、土性が粗粒質の土壌で、(A)層の発達は弱く、下層に砂礫質のC層がくるものが多い。これに属する大瀬崎統は、砂丘未熟土壌に似るが、粗粒で中～大礫の上部に厚いL～F層と(A)、CもしくはA、C断面を形成する土壌である。沼津図幅にみられるものと同様であるが、やや礫径が大きい。戸田村井田の海州に帯状に分布し、クロマツの粗林を形成している。

4 砂丘未熟土壌

排水良好な海岸砂丘地に分布し、土性は粒径のそろった細粒質な砂土で、わずかに発達したLF層とA、C断面をもつ未熟な土壌である。これに属する土壌統は御浜統で、戸田港の砂嘴地帯に分布している。表層部は風化が進み、腐植含量が増大し、土性も砂質壤土に移行している。クロマツ、イヌマキの天然針葉樹林として利用されている。

5 粗粒火山換出物未熟土壌

火山爆発に伴い山体の一部が破壊されて生じた岩屑および火山砂礫、火山灰がそのまま堆積したか、または雨水、河川水などと混じて流動したものを材料とした(A)C断面をもつ土壌である。(A)層は発達が弱く、かつ浅くて、非固結の上記材料に移行している場合

が多い。これに属する土壌統のうち、向原1統は、山地斜面下部に分布し、薄い中粒質表土層の下に風化軽石を含む砂層と軽石層がくるもので、普通畑に利用されている。筏場1統はカワゴ平火山の北斜面に800~1200mの巾で帯状に分布し、黒曜石を含む軽石層で、巨礫から中~大礫で組成され、表層には厚いF層の形成がみられる。主として天然混交林がみられるが、近年ヒノキの造林が進められている。

6 人工未熟土壌

これは本地域の場合、人工によって自然状態の土層断面形態が攪乱され、著しく変形されて、自然状態とは異った形態のものになっている農地の土壌と、ワサビ栽培のために造成されたワサビ田の土壌である。前者に属する土壌統のうち、上和田1統は、山頂部に分布し機械力による土層断面上部の攪乱、変形がみられるもので、普通畑として牧草栽培に利用されている。広野統は、上和田1統と同じく火山灰を土壌母材とし、機械開墾による土層断面上部の攪乱がみられるもので、丘陵の平坦な尾根筋に分布し、普通畑として飼料作物栽培に利用されている。戸田1統は、狩野川台風（昭和33年）の時に流失した水田に山土を客土として入れ、再び水田に復旧した土壌で、客土層は1m内外に及び、褐色を布び安山岩の変質礫を含んでいる。復旧後20年余を経た現在も、鉄・マンガン斑が下層に生成しているとはいえ、全体に未熟な断面形態である。主に戸田村戸田、土肥町小土肥、土肥に認められる。姫ノ湯2統も狩野川台風の際の流失と氾らん堆積により、未熟な断面形態をなすもので、狭い谷底低地に分布し、水田に利用されている。戸田2統は、戸田1統と同様に復旧した水田をミカン園に転換したもので、弱いA層の分化がみられる程度で、斑紋など水田耕作の痕跡は残っていない。戸田村戸田に局部的に存在する。ワサビ田に利用されている土壌統である筏場8統は、現地の砂や石礫を用いて人工的に造成された特殊な形態をもつもので、表層は細礫を含む砂質であるが、下層は比較的角がとれた石礫で組立てられている。

7 厚層黒ボク土壌

これは土色の明度、彩度とも2またはそれ以下の黒色ないし黒褐色の腐植に富む表土層（黒ボクのA層）が50cm以上の厚さをもつ土壌である。これに属する土壌統のうち、小下田1統は、安山岩の暗赤色変質物に由来する粘質なC層の上に50cmに達する腐植質、埴壤土質のA層がくる。土肥町小下田一帯の丘陵地の凹ないし平坦地に出現し、主に普通畑に利用されている。上船原平統は、70cm以上の黒色を呈する厚い腐植質、埴壤土質のA層の

下に暗褐色，明褐色を呈する粘質な下層土が来るもので，山地斜面下部に分布し，主に普通畑に利用されている。戸倉野1統は，厚さ60cm内外の黒褐色腐植質，埴塚土質土層の下に薄い褐色細粒質の下層土と石礫質の基岩風化層が来るもので，山地斜面下部に分布し，普通畑に利用されている。牧之郷統は，火山灰を母材とする残積性の黒ボク土で，河岸段丘上に分布し，主に普通畑に利用されている。芳野1統は，黒褐色中粒質の腐植層と黒褐色細粒質の腐植層との間に軽石に富む明褐色の砂層をはさみ，下層には灰白色を呈する軽石層がくるもので，山地斜面下部に分布し，普通畑に利用されている。猫越統は，黒褐色細粒質の腐植層と黒色細粒質の腐植層との間に暗褐色細粒質の土層をはさむもので，山地斜面下部緩傾斜地に分布し，普通畑に利用されている。筏場2統は，厚さ56cm内外の黒褐色粗粒質の腐植層の下に小礫に富む褐色粗粒質の下層土が来るもので，山地斜面下部に分布し，普通畑に利用されている。姫ノ湯1統は，1m以上の厚い黒色ないし黒褐色を呈する粗粒質～細粒質の腐植質土層を有するもので，山地斜面下部の緩傾斜地に分布し，普通畑に利用されている。

8 黒ボク土壌

これは土色の明度，彩度ともに，2またはそれ以下の黒～黒褐色を呈する腐植質表土層（黒ボクのA層）の厚さが25cm以上50cm未満のもので，その下位には褐色のB層が存在する。これに属する土壤統はいずれも火山灰を母材とするものであるが，そのうち筏場4統は25cm内外の黒褐色細粒質の腐植質表土層（黒ボク層）の下に小礫（軽石）を含む褐色細粒質の下層土（B層）を有するもので，山頂部や山地斜面上に分布し，普通畑に利用されている。天城牧場統と湯ヶ島1統は，厚さ25cm内外の黒ボク層の下に小礫（軽石）を含む暗褐色の下層土と褐色細粒質の下層土を有するものであるが，前者は暗褐色下層土と褐色下層土との間に薄い軽石層をはさんでいる。山頂部に分布し，主に牧草を栽培した乳牛の放牧場に利用されている。持越1統と浄蓮統は，黒ボク層（A層）と褐色細粒質のB層の下に小礫を含む暗褐色の土層（おそらく埋没土の表土層）が来るもので，前者に比べ後者は黒ボク層と褐色のB層およびその下位に来る暗褐色土層が厚くなっている。山地斜面の中部以下に分布し，主に普通畑に利用されている。西平統は，黒ボク層の下に明褐色ないしにぶい褐色の砂礫層（軽石）が来るもので，山地斜面に分布し，主に普通畑に利用されている。林野土壌では，田中山1統，葛城山1統，筏場3統，船原統，神田統および井田1統である。そのうち田中1統，葛城山1統および井田1統は沼津図幅での土壤名を踏し

ゅう。田中山1統は本図幅北東部の大仁町大野の緩斜面に分布し、沼津図幅に連らなっているが、A層の色相はやや退色の傾向がみられる。葛城山1統は西浦山地北端の緩凸な稜線にみられる比較的黑味の強い土壤である。井田1統は金冠山北および北東麓の緩斜面に分布し、沼津図幅同様A層の色相はやや淡い。これらの土壤統は天然広葉樹林が主体であるが、ときには天然針葉樹林もみられる。筏場3統は1統の北端にあつて緩凸斜面に分布し、黒味の強いA₂層と黒曜石の細片を含む砂質のB、C層を具え、主として天然広葉樹林として利用されている。船原統は船原、湯ヶ島を中心とする緩凸な尾根すじに分布し、褐色のB層直下もしくはC層中に10~20cm厚の軽石層を介在する土壤である。土肥峠を中心とした風衝の稜線部ではササで占められているが、その他の地帯では、主としてヒノキ人工林として利用されている。神田統は、賀茂村神田およびその周辺に分布し、暗赤褐色(5YR3/4)のB又はC層と黒味の強いA層をもつ土壤で、主として天然広葉樹として利用されている。

9 多湿黒ボク土

これは黒色ないし黒褐色を呈する腐植質表土層(黒ボク土のA層)とその直下の下層土層に斑鉄の存在がみられるものである。これに属する土壤統はいずれも火山灰や火山灰質堆積物を母材とするものであるが、そのうち茅野2統は、斑鉄を含む1m以上の厚い黒褐色細粒質腐植層(黒ボク層)中に薄い褐色の砂層をはさむもので、谷底低地の一部に分布し、水田に利用されている。与市坂統は、斑鉄を含む厚さ20cm内外の細粒質黒ボク層の下に石礫に富む明褐色細粒質の下層土を有するもので、山地斜面下部の緩傾斜地に分布し、水田に利用されている。金山統は、斑鉄を含む厚さ30cm内外の細粒質黒ボク層の下に斑鉄に富む明褐色細粒質の下層土を有するもので、山間の低地に分布し、水田に利用されている。持越2統は、斑鉄を含む45cm内外の細粒質黒ボク層の下に石礫を含む暗褐色細粒質の下層土と明褐色を呈する砂層が来るもので、山間の低地に分布し、水田に利用されている。青菜淵統は、厚さ15cm内外の斑鉄を含む細粒質黒ボク層の下に斑鉄に富む暗褐色細粒質の下層土を有するもので、山地斜面下部の緩傾斜地に分布し、水田に利用されている。月ヶ瀬1統は、青菜淵統に類似する層位の配列をもつが、斑鉄を含む黒ボク層が厚く(35cm位)、斑鉄と石礫に富む暗褐色層の下に石礫に富む褐色細粒質の土層が来るもので、山地斜面下部の緩傾斜地に分布し、水田に利用されている。長野2統は、斑鉄を含む厚さ25cm内外の細粒質黒ボク層の下に石礫に富む明褐色の砂層が来るもので、山間の低地に分布

し水田に利用されている。

10 淡色黒ボク土壌

これは黒色ないし黒褐色の表土層の厚さが25cm以下であるか、または腐植含量が少なく表土層の黒味が弱い黒ボク土壌である。これに属する土壌統はいずれも火山灰を母材とするものであるが、そのうち田中山4統は修善寺町の山地に分布し、表層の腐植含量が少ないため彩度、明度ともに3以上である。普通畑として利用されている。上和田2統は、極暗褐を呈する表土層の土性は中粒質で、褐色細粒質の下層土は粘性が強い。山地斜面に分布し、普通畑に利用されている。金山2統は、暗褐色細粒質の上・下層の中間に厚さ40cm位の灰白ないし明褐色の軽石層が存在するもので、山地斜面に分布し、普通畑に利用されている。向原2統は、薄い粗粒質黒ボク層の直下に厚さ30cm位の軽石層があり、その下位に細粒質の暗褐色、褐色の下層土層が来るものである。山地斜面に分布し、普通畑に利用されている。門野原統は、暗褐色中粒質の表土層の下に厚さ20cm位の軽石層と褐色細粒質の下層土を有するもので、山地斜面に分布し、普通畑に利用されている。月ヶ瀬2統は、厚さ15cm位の薄い細粒質黒ボク層の下に明褐色ないし褐色細粒質の下層土を有するものである。山地斜面に分布し、普通畑に利用されている。北又2統は、山地斜面の下部、小河川の谷底低地に接する部分に多くみられ、礫質の下層を持つもので普通畑に利用されている。林野土壌では西浦1統および田中山2統は沼津図幅の土壌名を踏しゅう。西浦1統は金冠山周辺の稜線およびその北東緩斜面に分布し、沼津図幅のものよりやや黒味が強い。主として天然広葉樹林に利用されているが、稜線の風衝地帯ではササを主体とした矮性の天然広葉樹の粗林を形成している。田中山2統は沼津図幅のものよりA層はやや薄い。大見川右岸の多賀火山南西斜面に分布し、天然針葉樹林もしくは広葉樹林として利用されている。奥野統は明彩度とも2、色もしくはそれ以上の色相をもつ。A層は一般に浅く、B層にわずかに軽石を含む土壌で、修善寺町奥野周辺の緩凸斜面に分布し、天然広葉樹林として利用されている。仁科統は明、彩度とも2以上の色相とやや厚いA層をもち、淡褐色のB層下部に20~30cm厚の軽石層を介在する土壌で、仁科峠北側の稜線に分布し、主として矮性の天然広葉樹林を形成している。

11 乾性褐色森林土壌

湿润温帯の森林植生下に発達するA、B、C層位配列を有する土壌である。この土壌は、森林植物の落葉、落枝とそれらの不完全分解物からなる粗腐植が地表面にやや厚く堆積し

その下に黒褐色のA層と褐色もしくは淡褐色のB層があり、両者の推移はやや判然としている。A層下部又はB層上部には乾燥破砕によって発達した独特な土壤構造がみられる。これに属する土壤統は葛城山2統、西浦2統、矢熊1統、湯ヶ島2統、土肥1統および大久須1統である。このうち葛城山2統および西浦2統は、沼津図幅の土壤名を踏しゅう。葛城山2統は西浦山地南端の急凸な尾根すじに分布し、主として天然広葉樹林として利用されている。西浦2統はA₁、A₂、B₁、B₂の層位配列のその下層に、ややにぶい赤褐色を帯びたC層がみられる。遼磨火山の北および東斜面に分布し、東にのびる数条の長い緩凸な尾根に分布し、主としてヒノキ人工林として利用されている。矢熊1統は、A層およびB層の発達はやや弱い。狩野川右岸の天子山地に分布し、天然広葉樹林として利用されている。湯ヶ島2統は、B層下部に10~20cm厚の軽石層が介在する土壤で、天城湯ヶ島町および中伊豆町筏場、地藏堂地内に分布し、主としてヒノキ人工林として利用されている。土肥1統は、やや薄いA層と暗赤褐~明褐色(5<7.5Y R4.5/6)のBもしくはC層をもつ土壤で、土肥町地内に分布し、主としてヒノキ人工林もしくは天然広葉樹林として利用されている。大久須1統は、図幅南縁部に帯状の分布域を有し、天然広葉樹およびヒノキ人工林を形成している。

12 乾性褐色森林土壤(黄褐系)

乾性褐色森林土壤の分布地帯で暗褐色を呈し、やや発達したA層と7.5Y Rの明、彩度の高い色相を帯びたB層をもつ土壤である。これに属する平石1統は、土肥町平石および賀茂村神田地内で、基岩の粘土風化の著しい地帯に分布し、主として天然広葉樹林を形成している。

13 褐色森林土壤

乾性褐色森林土壤と同様の森林帯にあるが、常に地中水分に富む斜面下部に多く現れ、黒褐色ないしは暗褐色を呈するボウ軟な厚いA層が発達し、その下部にある褐色のB層に漸変している。これに属する土壤統は葛城山3統、西浦3統、田中山3統、筏場6統、矢熊2統、湯ヶ島3統、土肥2統および大久須2統である。このうち葛城山3統、西浦3統および田中山3統は沼津図幅の土壤名を踏しゅう。葛城山3統および西浦3統はそれぞれ葛城山2統、西浦2統に隣接し、その下側斜面および沢すじに分布し、ヒノキ人工林もしくは天然広葉樹林として利用されている。田中山3統は、多賀火山の南西山麓の沢すじに分布し、スギ人工林として利用されている。矢熊2統は、1統に隣接し、山腹ないしは

沢すじに分布する。A層およびB層上部に軽石を含む土壌で、スギ・ヒノキ人工林、天然広葉樹林として利用されている。筏場6統は、筏場3統下側の急凹斜面に分布し、砂質のA、B層とその下部にある細～中粒質の礫層からなり、主としてスギ人工林として利用されている。湯ヶ島3統は湯ヶ島2統に隣接し、その下斜面に分布し、やや薄いA、B層の下部に15～25cm厚の軽石層を含む土壌で、主としてスギ人工林として利用されている。土肥2統は、にぶい赤褐色～褐色(5<7.5Y R4/3.5)の色相をもつB層を有する土壌で、土肥1統に隣接し、その下側に分布し、スギ又はヒノキ人工林として利用されている。

14 褐色森林土壌（黄褐色系）

乾性褐色森林土壌（黄褐色系）の分布する森林帯の斜面下部にみられる。A層は暗褐色、B又はC層はやや塩質で7.5Y R～10Y Rの色相を有し、明度、彩度とも高い。これに属する平石2統は1統に隣接し、スギ・ヒノキ人工林として利用されている。

15 湿性褐色森林土壌

上記の両褐色森林土壌と同じ森林帯に属するが、常に水が集りやすい斜面下部や谷底の緩斜面にあらわれる黒褐色のA層と暗褐色ないしは灰褐色のB層よりなり、両者の推移は漸変している。これに属する土壌統は湯ヶ島4統、土肥3統および大久須3統である。湯ヶ島4統は3統に隣接し、その下部の緩凹斜面に分布し、B層下部の礫中にはわずかな軽石を含む土壌で、スギ人工林として利用されている。土肥3統および大久須3統はそれぞれ土肥、大久須2統の下側急凹斜面に分布し、スギ人工林として利用されている。

16 湿性褐色森林土壌（黄褐色系）

上記両褐色森林土壌（黄褐色系）と同じ森林帯に属し、常に水が集りやすい斜面下部にあらわれる。これに属する平石3統は2統の下側に隣接し、やや粘土質で灰褐色のB₂層には赤褐色の斑鉄を有する土壌で、主としてスギ人工林として利用されている。

17 黄色土壌

湿润気候の常緑広葉樹林下に生成された土壌で、薄い暗色のA層の下のB層は5Y Rよりも黄色の色相をもつものである。一般にA層の腐植含量が低く、B層は粘土化がすすみ細粒質である。これに属する本地域の土壌統は、固結火成岩風化物を母材とするものであるが、そのうち下白岩統は暗褐色細粒質の表土層（A層）の下に細粒質の暗褐色、褐色の下層土（B層）と石礫質の母岩風化層（C層）を有するもので、山頂部や山地斜面上部に分布し、普通畑、樹園地に利用されている。梅木1統は、斑鉄を含む灰黄色細粒質の表土

層の下に斑鉄に富む灰黄色の下層土を有するもので、山地斜面下部に分布し、水田に利用されている。

18 暗赤色土壌

石灰岩または塩基性岩などを母岩とする土壌で、下層土は5YRの色相をもち、赤色土壌より明度、彩度とも低い土壌である。これに属する土壌統のうち、井田4統の黒褐色のA層はごく薄く、暗褐色細粒質のB層の下に暗赤褐色の埴土層がくる。時にはこれが50cmより浅い所にもみられることがある。これは、安山岩の弱赤色変質物に由来すると思われる。土肥町以北から戸田村戸田、井田一帯および土肥町小下田付近の傾斜地に分布し、主にミカン園、普通畑として利用されている。藤沢統は、井田4統を水田として利用した土壌で、全層が重埴土よりなること、下層に暗赤色土層がくることが特色である。落水後の乾燥に伴って、普通の水田よりも幅広い深い亀裂が表面から発達する。土肥町小下田付近の丘陵斜面に柵田として分布する。林野に分布する井田2統および3統は、戸田村のほぼ全域にみられる。2統は乾性土壌で尾根すじに多く、3統はその下側の山腹ないしは斜面下部に分布する適潤性土壌である。ともにB、C層は暗赤褐色の色相を有するが、この色調は、2統より3統が強い。2統は天然広葉樹林、3統はスギ・ヒノキ人工林として利用されている。

19 褐色低地土壌

比較的発達がすすまぬA層の下に、黒褐、暗褐、褐、明褐、褐灰、黄灰、灰褐、灰黄色を呈するB層をもち、土性が中粒～細粒質の土壌である。これに属する土壌統のうち、地藏堂1統は斑鉄を含む黒褐色細粒質の表土層の下に褐色粗粒質の下層土を有するもので、谷底低地に分布し、水田に利用されている。姫ノ湯3統は、斑鉄を含む薄い黒褐色細粒質表土層の下に灰褐色の砂層と砂礫層が来るもので、谷底低地に分布し、水田に利用されている。戸倉野2統は、斑鉄を含む暗褐色細粒質表土層の下に斑鉄を含む暗褐色、褐色細粒質の下層土を有するもので、山地斜面下部に分布し、水田に利用されている。梅木2統は、斑鉄を含む灰黄色細粒質表土層の下に斑鉄に富み、小礫を含む灰黄色の下層土を有するものである。山裾の低地に分布し、水田に利用されている。元村3統は、斑鉄を含む灰黄褐色細粒質表土層の下に斑鉄に富む密な灰黄褐色ないし褐灰色細粒質の下層土を有するもので、地下水位は低いが水の地下浸透性が劣るため、表土(作土層)に還元斑が存在する。山間の谷底低地に分布し、水田に利用されている。元村2統、梅木3統、地藏堂2統およ

び尾崎統は有効土層が浅く、地表下25~30cm位で砂礫層が出現する。いずれも表土層とその直下の下層土に斑鉄の存在がみられ、尾崎統（中粒質土性）以外は、土性が細粒質である。山間の谷底低地に分布し、水田に利用されている。西平1統、雲金統および上白岩小川統は、有効土層が浅く、地表下16~30cm位で砂層が出現する。西平1統は、土性が細粒質で斑鉄の存在がみられる。雲金統は土性が中粒質である。上白岩小川統は、砂層の下に砂礫層が来るものである。いずれも谷底低地に分布し、西平1統は水田に、他は普通畑に利用されている。滝尻統、下船原統、関野統および棚場統は、地表下42~60cmで砂礫層が出現するものである。滝尻統は、斑鉄を含む黒褐色細粒質の表土と下層土を持つものであり、下船原統は斑鉄を含む黄灰色細粒質の表土の下に斑鉄に富む黄灰色~黄灰褐色の細砂を含む細粒質下層土を持つものである。いずれも谷底低地に分布し、水田に利用されている。関野統は、厚い黒褐色細粒質表土層の下に褐色細粒質の下層土を有するものであり、棚場統は暗褐色細粒質の表土と下層土を持つものである。谷底低地に分布し、普通畑に利用されている。町屋統は、斑鉄を含む薄い灰褐色細粒質表土層の下に斑鉄と小礫を含む灰褐色細粒質の下層土があり、地表下65cm位のところから軽石層が出現する。谷底低地に分布し水田に利用されている。八田原統は、斑鉄を含む褐灰色細粒質の表土と下層土を有するもので、下層土の中部に鉄斑紋の集積が認められるものである。関戸統、西平2統、月ヶ瀬2統は、土層断面の下部に黒褐色~黒色を呈する腐植に富む細粒質の層を有するもので、その層の上部に、関戸統は斑鉄を含む褐灰色細粒質の表土と下層土を有し、西平2統は斑鉄を含む細粒質の黒褐色表土と暗褐色の下層土を有する。月ヶ瀬2統では、黒褐色土層の上部に斑鉄を含む灰褐色細粒質の表土と下層土が、下部に斑鉄を含む褐色細粒質の土層と砂礫層が存在する。いずれも谷底低地に分布し、水田に利用されている。長野1統は、土層断面の上・下層が黒褐色を呈し、土性は細粒質である。斑鉄の存在は地表下50cm位まで認められる。谷底低地に分布し、水田に利用されている。青羽根統は、斑鉄を含む厚さ25cm位の黒褐色細粒質表土層の下に黄灰色を呈し、斑鉄に富む細粒質の土層と礫に富む明褐色細粒質の土層が来るものである。谷底低地に分布し、水田に利用されている。上船原統は、地表下52cm位のところに厚さ30cm位の軽石層を有し、軽石層の上部には灰褐色細粒質の表土と下層土を有し、地表下38cm位のところまで斑鉄の存在が認められる。軽石層の下部には褐色細粒質の火山灰層が来る。山間の低地に分布し、水田に利用されている。佐野統は、斑鉄の存在する灰黄褐色細粒質の表土と下層土の下に砂層が来るもので、砂層の上

部は灰黄褐色を呈し、斑鉄の存在がみられるが、下部（地表下73cm位）は暗緑灰色を呈するグライ層になっている。谷底低地に分布し、水田に利用されている。松ヶ瀬統は、斑鉄を含む褐灰色細粒質の表土と下層土の下に重粘な暗褐色の土層が来るもので、谷底低地に分布し水田に利用されている。田代1統は、河川の運搬による黒ボクの二次堆積物が厚く下層にみられるもので、水田に利用されている。大平1統は、狩野川段丘上に分布し、普通畑として利用されている。北又1統は、小河川の谷底低地に分布する浅層の褐色低地土壌で水田として利用されている。中島1統は、狩野川沖積地と接する谷底低地の部分に分布し、断面の上部に砂の混入がみられるもので、水田として利用されている。

20 粗粒褐色低地土壌

比較的発達がすすまぬA層の下に黄灰色、暗褐色、黒褐色のB層を持ち、土性が粗粒質の土壌である。これに属する土壌統のうち、大平2統は、狩野川に沿った段丘上に分布し、圃場整備後に形成されたものであるが、土壌断面内の層位の分化がすでに認められるようになっている。水田として利用されている。筏場7統は厚さ30cm位の黒褐色粗粒質土層の下に褐色の礫に富む砂層が来るもので、谷底低地に分布し、水田に利用されている。姫ノ湯4統は、礫を含む暗褐色粗粒質の表土と下層土の下位、地表下40cm位のところに砂礫層が出現するもので、谷底低地に分布し、普通畑として利用されている。

21 細粒灰色低地土壌

これは土性が細粒質で、土層断面の色相は灰色を呈し、斑紋の存在がみられ、地表下80cm以内にはグライ層の出現がみられぬものである。これに属する元村4統は、斑鉄を含む灰色細粒質の表土と、斑鉄に富む灰～灰褐色細粒質の下層土の下に、礫に富む褐色細粒質の土層が来るもので、谷底低地に分布し、水田に利用されている。

22 細粒グライ土壌

これは土性が細粒質で、地表下50cm以内にグライ層が出現するものである。これに属する土壌統のうち宮前統は、地下水位が高く、地表下30cm位のところに暗青灰色を呈するグライ層が出現する。中伊豆町の西川に沿った低地の一部に分布し、水田に利用されている。表土（作土）とその直下の下層土には、鉄斑紋の存在が認められるが還元斑が多く、暗青灰色を呈している。八木沢統は、作土層直下から強グライ土層が出現し、その上半は黒味の強い埴質土層で、50cm以下に暗色味を帯びた砂質土層がくる。土肥町八木沢の小河川平地に分布し、水田として利用されている。柴統は、作土層直下から強グライ土層が出

現する。作土も落水後あまり酸化がすすまないといった排水の悪い状況にある。上半は砂質埴壌土、50cm以下はやや分解の進んだ黒褐色の泥炭である。賀茂村宇久須柴の小谷が海に面した所に生じた平地に水田として、ごく小面積確認されたのみである。田代2統は、大見川流域の透水性が悪く、湧水面が65cmのところに認められる土壤で、水田として利用されている。

23 粗粒グライ土壤

これは土性が粗粒質で、地表下50cm以内にグライ層が出現するものである。これに属する土壤統の井田5統は、強グライ層が50cm以下より出現し、黒泥質埴質である。この上に暗色味の強い砂壤土質の斑紋含有層がある。戸田村井田の小谷の出口付近の平地に水田として存在するのみである。

Ⅳ 傾斜区分図

本図葉にふくまれる地域の傾斜分布は、火山体の解体と開析にともなう特色があらわれている。それは構成物質の差異、侵食の段階、水系の方向と火山原面ののこり具合、溶岩流出による平坦面の分布、河川の下刻や源流部の谷頭侵食による急斜面の形成、火山体の東斜面と西斜面との侵食性式の差異などによって、興味ある結果がみられる。また、それらは土地利用との関係も深い。南北方向に流路をとる狩野川の西側には、北から達磨、棚場、猫越などの山体が位置するが、南にゆくにしたがって開析がすすみ、同一の傾斜分布の連続性がなくなる。達磨山の東と北斜面は、ほぼ直線的のびる谷によって侵食がすすみ尾根ぞいと谷ぞいに $S_1 \sim S_4$ の緩斜面が広くのびて分布していて、その面積も広い。修善寺を中心とする尾根上の平坦面はゴルフ場に改変されているが、谷底低地にのぞむ斜面は水系も発達して急傾斜となり、傾斜の変貌が著しい。棚場火山も解体がすすんでいるが、東斜面には $S_3 \sim S_4$ が直線的に残る。猫越火山の東斜面にも $S_3 \sim S_4$ が残るが、分断されて連続性はない。しかし天城牧場にみられるような山頂部の平坦面にくらべて谷壁は急斜面となる。

真城山から猫越峠へとつづく西伊豆の分水界をさかいにして、東斜面と西斜面の傾斜分布は対照的である。戸田大川、土肥山川、宇久須川などは、放射状にのびて侵食をすすめ、谷ぞいや谷頭部には $S_6 \sim S_7$ の急傾斜がとりまいている。西にのびる尾根の末端には緩斜面がみられ、急崖で駿河湾に面している型も特色である。小下田あたりの $S_3 \sim S_4$ の緩斜面は、大規模な地すべり性崩壊によって発達した緩斜面で押し出し地形的である。

天城火山は白田川源流の急斜面や北西部の谷ぞいををぞくと、 $S_2 \sim S_4$ などの緩斜面も広い。これは、新しい時代の溶岩流出によってつくられた台地状の地形である。地図の表限の限界から一様な平坦地となっているが、局地的な起伏はおおい。溶岩や軽石流は北東方面にも流出し、大見川にまで達している。天子火山もその北部に広く $S_3 \sim S_4$ の緩斜面斜が残り、ゴルフ場と別荘地となっている。多賀火山も尾根ぞいに緩斜面にのびて畑地となるが、谷底に面する斜面は林地で、傾斜分布と土地利用との関係が深い。なお西海岸ぞいには海食崖が形成されており、急崖で海に接するが、とくに戸田から土肥にかけてその規模は大きく、断面をとると傾斜の変換も明瞭である。

(北川光雄)

V 水系谷密度図

本図葉にふくまれる水系は、北流する一級河川狩野川と大見川とその支流、火山群の西斜面を西流して駿河湾にそそぐ二級河川の水系からなる。駿河湾にそそぐ戸田大川、土地山川、宇久須川などはいずれも湾奥部に河口をもち、下流には沖積地を形成する。河口から2~3 kmほど上流までに人工的に固定され、築堤や護岸の改修がすすみ、人工河川となっている。その上流部では3河川とも放射状に水系区をひろげ、それぞれの上流部は樹枝状の水系となって開析をすすめているために谷密度も大きな値となる。

北流する狩野川本流に分流する西伊豆火山群から東流してくる河川は、東西方向に直線的にのびる谷で、ほぼ平行する火山の侵食谷となっている。谷底には堆積地の発達するほど運搬量もおおきく、軽石もおおいため堰堤や床固めなどの改修工事がすすみ、人工河川化している。柿本川、船原川、修善寺川などの東西方向の主流に対して、分流する小支谷のパターンは特殊な水系網を示し、地形的にはひだのこまかい斜面を形成している。また上流部は樹枝状のパターンを示すが、西側斜面にみられるほどの流域拡大の作用はみられず、若い谷の特色を示す。

狩野川本流の湯ヶ島付近から上流部は本流、長野川、猫越川などが放射状にのび、小支谷はいずれも樹枝状のパターンとして発達する。本流は修善寺で大見川と合流するが、沖積地や新しい溶岩流、段丘の中を下刻する形をとり、岩石に制約されて屈曲する部分もみられ、流路は自然に順応している。大見川もおおきの支流を集めるが、多賀火山からの年川、古川などは直線的放射状谷の末端部であり、構造的に流路のきめられた場合もある。大見川上流部や地藏堂川などは、溶岩流出に左右されて流路がとられている場合もみられる。カワゴ平や八丁池から流出した、あたらしい時代の溶岩流の表面の開析は十分でなく断片的な流路もみられる。狩野川と右岸から流入する河川はいずれも小さく、左岸の支流と対照的である。

このような水系にもとづく谷密度は地域差が大きいく。谷密度は計測誤差もある程度ふくまれるが、地形の開析の程度を表現する指標として重要である。源流部の樹枝状におおきの谷に分岐して発達する部分、小さいひだ状に小支谷が斜面を開析する部分などは、50~60の値をもって密度は大きくなっている。

(北川光雄)

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T
A			7	34	29	32	38	32	36	45	31	24	40	39	35	13	32	38	20	27
B			21	46	33	45	43	40	42	42	34	37	41	24	18	15	25	48	31	27
C		1	23	34	29	36	42	32	37	48	45	44	22	33	31	32	17	31	26	24
D		4	14	33	39	39	37	30	43	52	35	32	30	25	26	19	19	36	33	35
E		11	32	33	35	47	51	34	45	47	42	29	30	40	33	17	12	20	16	20
F		18	32	42	43	47	47	50	52	55	44	30	38	31	33	17	20	22	31	21
G		3	40	43	43	43	41	44	55	49	36	35	31	35	29	21	19	21	31	24
H			21	37	36	46	41	44	58	43	35	35	32	22	19	26	28	28	35	29
I			15	44	43	43	41	34	50	52	48	35	33	28	24	25	31	29	34	25
J			7	32	39	46	41	42	54	41	32	36	36	28	20	27	31	32	26	22
K				25	39	39	36	36	41	38	32	23	31	33	28	33	29	34	29	20
L			2	24	26	31	32	46	59	52	27	29	30	27	23	32	45	24	32	25
M		1	14	43	29	35	35	34	51	54	32	38	36	33	24	37	34	33	23	25
N	1	9	25	39	42	36	39	44	48	41	32	32	45	38	17	34	29	29	14	27
O	4	30	39	32	44	47	23	28	42	37	36	40	32	30	22	39	21	27	19	29
P	3	24	36	34	35	44	34	30	38	27	27	36	32	33	22	29	33	33	14	19
Q	4	25	40	39	39	42	30	32	38	35	33	34	40	31	15	30	35	43	20	17
R		2	30	32	36	40	35	29	32	35	32	28	39	33	26	28	33	24	16	22
S		1	17	34	33	36	34	36	26	34	33	39	43	30	25	26	25	27	30	36
T		23	33	31	35	33	32	34	33	28	33	43	40	31	38	38	25	19	32	30

< 谷密度図 >

Ⅵ 利水現況図

本図幅内の利水状況は、一級河川狩野川水系の21河川と、西部沿岸の7河川を主な水源として農業用水、上水道、水力発電等に利水している。

各河川とも豊かな水量を保持して今日までほとんど干害等の障害は起生していない、このことは水量、水質、水温などに大きく制約されるわさび栽培が、この地域の溪谷で古くから盛んであることからもうかがえる。

本地域の水田は、河川沿いに発達した段丘を対象に形成されており、約1000haの水田に383の取水施設から19.7m³/Sのかんがい用水を取水している、このうち修善寺町の早霧湖用水（溜池A=24ha）戸田村の井田用水（揚水機A=5ha）を除けばすべて自然の地形を利用した小規模の取水施設である。このことは狭あいな溪谷に散在する階段状の水田が多いため、大規模取水施設の整備は困難で、取水量が過大となる要因をなしている。

又、別表に示すとおり、10ha以上の比較的まとまった用水受益面積は22カ所、328haで、全体面積の33%にすぎない。

生活用水は、集落が河川沿いに立地して規模も小さく散在していることから、利用形態も上水道、簡易水道、専用水道により展開されている。

水源については日最大給水量55,104m³の70%は湧水、表流水を利用して残りの30%を地下水に求めている。一方、給水人口は7町村の全人口63,812人に対し、上水道は6カ所で50,779人、簡易水道は32カ所で12,109人、専用水道は10カ所で306人が給水を受け、普及率は99%となっている。

また、東京電力の水力発電所が狩野川（天城湯ヶ島町地内、2カ所）大見川（中伊豆町地内、1カ所）で、最大使用水量8.65m³/Sにより3,138kWの発電を行っているが、発電後に両河川に還元しているので実質的な消費はない。

（小笠原勝彦，山本貢，加藤忠敏）

第1表 主要用水の概要

市町村名	河川名	関係 用水名	管 理 団 体 名	受益 面積	取 水 量		取水 期間	水利権 許可慣行
					最 大	常 時		
				ha	m ³ /S	m ³ /S		
修善寺町	修善寺川	熊坂用水	熊坂用水組合	23.0	0.08	0.08	年間	○
〃	〃	瓜生野	瓜生野	15.0	0.05	0.05	〃	○
〃	大見川	加殿	加殿	27.0	0.55	0.55	〃	○
〃	湯舟川	舟平	舟平	10.0	0.08	0.04	〃	○
〃	山田川	犬野	犬野	10.0	0.12	0.05	〃	○
〃	古川	柿宇土	柿宇土	15.0	0.08	0.02	4~9月	○
〃	〃	牧之郷	牧之郷	20.0	0.05	0.05	年間	○
〃	深沢川	大平上	大平上	18.0	0.06	0.06	〃	○
〃	早霧湖	早霧湖	日向土地改良区	24.0	0.06	0.06	〃	○
天城湯ヶ島町	柿木川	仲	仲用水組合	11.0	0.129	0.09	4~9	○
〃	船原川	青羽根	青羽根	13.0	0.428	0.08	〃	○
〃	吉奈川	月ヶ瀬上	月ヶ瀬	11.0	0.192	0.06	〃	○
〃	長野川	長野	長野区	13.0	0.300	0.080	〃	○
中伊豆町	大見川	清水	山下謙	12.0	0.280	0.190	年間	○
〃	〃	三郷	山下源司	12.0	0.780	0.130	〃	○
戸田村	大川	平戸	平戸用水組合	10.0	0.108	0.105	5~10	○
〃	〃	大上	大上	26.0	0.100	0.108	〃	○
土肥町	八木沢大川	砂田	瀬尾豊	12.0	0.240	0.150	〃	○
〃	山川	立花	福室馨	10.0	0.240	0.150	〃	○
〃	〃	前木風	小長谷精一	12.0	0.256	0.160	〃	○
〃	小土肥大川	岩戸	勝呂友時	10.0	0.240	0.100	〃	○
賀茂村	宇久須川	月原	受益者	14.0	0.179	0.112	4~10	○
計	22			328	4.60	2.52		

資料：水利用実態調査（54年度）

第2表 生活用水の概況

市町村名	人口	上水道		簡易水道		専用水道		合計	
		給水人口	最大給水量	給水人口	最大給水量	給水人口	施設能力	給水人口	普及率
	人	人	m ³ /日	人	m ³ /日	人	m ³ /日	人	%
天城湯ヶ島町	8,136	6,211	4,200	1,711	480	49	3,300	7,971	98.0
修善寺町	17,495	17,035	13,250	282	1,730	65	1,300	17,382	99.4
土肥町	6,783	4,746	4,862	2,027	526	10	85	6,783	100.0
大仁町	14,461	12,536	10,781	1,589	872	90	700	14,215	98.3
中伊豆町	7,254	5,325	3,779	1,772	1,489	92	390	7,189	99.1
賀茂村	4,616	—	—	4,587	3,120	—	—	4,587	99.4
戸田村	5,067	4,926	4,036	141	75	0	129	5,067	100.0
計	68,812	50,779	40,908	12,109	8,292	306	5,904	63,194	99.0

資料：静岡県の水道の現況（54年3月31日現在）

第3表 水力発電の概況

河川名	水利使用者	取水	水量	発電	力	型式	水源種別
		最大	m ³ /S	最大	KW		
狩野川	向原発電所	最大	2.31	最大	820	水路式	表流水
	東京電力KK	常時	0.84	常時	280		
"	湯ヶ島発電所	最大	1.61	最大	1,633	"	"
	東京電力KK	常時	0.70	常時	720		
大見川	梅木発電所	最大	4.73	最大	685	"	"
	東京電力KK	常時	2.23	常時	325		
計	3カ所	最大	8.65	最大	3,138		

資料：水利権現況調査

Ⅶ 土地利用現況図

1 農 地

本地域の東側において、伊豆半島の山地間を南北に流れる狩野川と、その諸支流によって形成された谷底低地は、大部分が水田として利用されているが、一部には普通畑、樹園地としての利用もみられる。天城山地を流れる狩野川とその支流である大見川の流域における地蔵堂、筏場などの谷間の低地では、古くから特殊水田としてのワサビ田が造成され、豊富で清冽な谷川の水を利用してワサビ栽培が行われている。

狩野川とその支流の流域における山地では、各所に普通畑とミカン園の散在した分布がみられるが、本地域の東北部における中伊豆町上和田の山頂部には桑園、ブドウ園、普通畑としての利用がみられる。沼津市に属する本地域北端の山地には、かなり広いミカン園の分布がみられる。本地域の西南部山地における仁科峠の周辺に造成された天城牧場では乳牛の放牧地に牧草の栽培が行われている。

駿河湾に臨む本地域西側の西伊豆海岸地帯では、井田、戸田、土肥および宇久須の山地斜面にミカン園と普通畑および一部にビワ園の散在した分布がみられる。土肥の低い山地斜面や低地に分布する普通畑では、キク、カーネーションなど花きの施設栽培と、キヌサヤエンドウなど野さいの露地栽培が行われ、主に東京市場へ出荷されている。西伊豆山地から流れでて駿河湾にそそぐ小河川沿いに形成されている井田、戸田、土肥および宇久須の低地は、主に水田に利用されているが、戸田港、土肥港の市街地に近いところは最近農地の住宅、商工業および観光用地への転用が著しくすすんでいる。

(近 藤 鳴 雄)

2 林 地

本図に含まれる林地は、真城山(491m)、遠磨山(981m)から西伊豆スカイラインを経て天城牧場に至る山稜西斜面山麓と、図幅中央部の狩野川までの東斜面山麓、及び天城山脈から大見川に至る北斜面山麓に大別され、図幅上部、及び里山は果樹園、宅地等が散在したモザイク状に広葉樹林が分布しており、中央より下部は国有林を主にスギ、ヒノキの若い人工林の多い森林となっている。

遠磨山より西伊豆スカイラインの西斜面山麓の林地は、急稜で大部分が民有林で、伽藍

山付近が国有林となっている。里山以外は主としてスギ、ヒノキが植林されているが、戸田峠（標高700m~1000m）付近は笹、ドウダンツツジの原生林が多く見られる。特にこの地域は駿河湾にのぞみ眺望がよく、別荘分譲地等の土地開発が進み、また、みかんの不振によるみかん畑から林地への転換もみられる。

里山地域は、往時から薪炭林業が盛んであったため、畑地や果樹園が散在したクスギ、コナラ等の雑木林が多い。

戸田峠、達磨山より西斜面一帯の山麓は、水源かん養保安林に、仁科峠から宇久須川上流流域は土砂流出防止保安林に指定されている。

図幅中央の東斜面山麓で大沢川より上部の林地は、果樹園、畑地、天然雑木林が混在した状態で、特に大沢川から柿木川の中央里山地区は、土地開発が盛んで、ゴルフ場、レジャー施設や温泉を持った別荘分譲地であり、その間にクスギ、コナラ等の雑木が主体の山林が多く散在している。

持越川より南側は大部分が国有林で、スギ、ヒノキの人工林が多く、大杉が点在している。この大杉は御礼杉といわれるもので、宝暦9年（1759）ケヤキ、ヒノキ、スギ、マツカヤ、モミ、クス、ツガ、およびカシの9種の林木を制木とし、公用以外は禁伐とした。その他の雑木は地元民の自由な伐採を許し、伐採跡地にスギを植えさせた。このスギが今大木となって残っているものである。

天城山脈から北斜面山麓の里山地域では、散在した状況の雑木林が多く、狩野川添には竹林も多くみられる。また、この地域は、しいたけ生産が盛んなこともあって、しいたけ原木林の人工林も進められている。

図幅下部の国有林で標高1000m以下は、スギ、ヒノキの人工林が多く、1000m以上では天然広葉樹が主体の林地となっている。天城山脈の嶺線付近は、八丁池を中心に保健休養保安林になっており、現在面積1194haの昭和の森天城山自然休養林事業が56年完成を旨ざして進められており、観光地における保健休養機能の高い森林となっている。

（渡 辺 光 男）

森 林 概 況

(単位：ha)

市町村名	林 野 総面積	民 有 林						国有林
		総 数	人工林	天然林	竹 林	原 野 そ の 他	人工林率	
沼 津 市	6,549	5,088	3,159	1,774	29	126	62.1	1,461
大 仁 町	2,860	2,380	1,118	1,124	39	118	46.4	461
修 善 寺 町	4,893	4,207	1,503	2,627	37	40	35.6	655
中 伊 豆 町	9,241	6,540	3,652	2,725	44	119	55.8	2,701
天 湯 ヶ 島 町	12,249	6,830	3,959	2,583	117	176	52.5	5,414
東 伊 豆 町	5,885	4,063	1,792	1,793	10	468	44.1	1,822
河 津 町	8,327	4,876	2,607	1,830	45	394	53.5	3,451
戸 田 村	2,993	2,969	1,560	1,115	143	151	52.5	24
土 肥 町	4,154	3,857	2,007	1,659	36	157	52.0	295
賀 茂 村	3,450	3,225	2,118	924	35	148	65.7	225
西 伊 豆 町	5,935	3,668	1,956	1,614	8	90	53.3	2,267
計	66,536	47,703	25,431	19,768	543	1,987	53.3	18,776

(備考) 県平均人工林率58.8%

(注) 1. 各市町村の全域(図幅外も含む)を示す。

2. 県林政課資料(53年)

1981年2月 印刷発行

修善寺地域

土地分類基本調査

修 善 寺

編集発行 静岡県農地森林部農地企画課

静岡市追手町9番6号

印刷 株式会社 大村印刷所

静岡市常磐町2丁目12